「多文化共生」のための教育と外国人保護者の果たす役割

－奈良の事例を通して－

研究成果報告書

〈目　次〉

はしがき …… 1

序　章　多文化共生教育をめぐる状況と
外国人保護者の役割 …… 3

第１章　「奈良外国人保護者の会」の活動とその意義 …… 9

第２章　「保護者の会」15 周年記念多文化共生教育
フォーラムの記録　―地域で育てる多文化教育― …… 34

第３章　保護者と教師の連携した民族教育
申点粉氏のライフヒストリーを通して …… 56

はしがき

「多文化共生」のための教育が求められている。多民族化、多文化する社会にあって、文化的な背景の異なる人々と「共に生きていく社会」をどう創造するか、そのための教育が教育現場に求められている。

従来は、「外国人＝在日コリアン」という状況であったが、現在では、中国、ブラジル、ペルー、フィリピンなど、民族的、文化的背景の異なる児童・生徒が、急増しており、その子どもたちの多くが、周囲の偏見から自分の出自（ルーツ）を隠して、民族的な誇りを持てない状況に置かれている。周囲の日本人児童・生徒との関係性の中で、彼らの民族的なアイデンティティをどう保障するかが課題であり、保護者の組織化と教師の連携は不可欠である。

本研究の目的は、外国籍の子どもたちの教育を、学校や教師任せにするのではなく、保護者を組織化して効果的に推進するプランを、具体的に「奈良外国人保護者の会」の活動を紹介して、「多文化共生」のための教育への共有財産を確認しようとするものである。

奈良県の在日コリアンは、約６０００人である。その内、約１５０世帯、５００人の子どもたちが「保護者の会」の活動に参加してきた。分断されていた保護者たちが仲間を発見し元気づけられ、サーキャンプや民族文化祭り行う中で、子どもたちはハングルに接し、民族の文化に馴染んできた。したがって児童・生徒の本名使用率は非常に高く、「保護者の会」の活動が最も活発に展開されている生駒市では実に、５０％を超えている。その意味で、全国的にも注目されており、他の自治体の外国人教育のモデルになるだけでなく、近年増大しているニューカマーの児童・生徒の民族的なアイデンティティを育成する教育のモデルにもなるものと確信している。

まず、序章で在日外国人をめぐる全国的な状況を確認するとともに、外国籍の子どもたちの置かれた教育環境について概観する。その際、子どもたちの民族的アイデンティティの育成について、保護者の果たす役割にも若干、言及する。

次に、第１章では、奈良県における「奈良外国人保護者の会」（以下「保護者の会」）の活動について、結成以来、詳細に報告する。奈良では１９９２年に「保護者の会が結成され、現在まで約１５年間継続して活動が展開されている。当時、小学生であったオリニ（子どもたち）が大学生や社会人になって、現在、「保護者の会」の活動を支えている。活動に関わった者として、成長した彼らの姿に励まされることがしばしばある。その経緯などについても詳細に報告している。なお、本稿は李和子氏と共著で発表した「奈良・在日外国人保護者の会」の活動とその意義」（２００５年　奈良教育大学紀要　第５４号）に、その後の３年間の活動を加筆修正したものである。

第２章では、２００７年７月に行われた「奈良・外国人保護者の会　15 周年記念多文化共生教育フォーラム―地域で育てる多文化教育―」で討議された内容をテープで起こ

し、発表者に修整加筆していただいたものである。発表者は、奈良県教育委員会の行政担当者、「保護者の会」と共に歩んできた教師、そして「保護者の会」の設立時から会の運営に関わった当事者で、彼らの声を、できるだけそのまま伝えるように配慮した。研究代表者がコーディネーター役を務め、「保護者の会」の１５年を対象化して、その意義を一般化するように配慮した。当事者の熱い想いを聞き取っていただきたい。

第３章では、川西市在住の申点粉氏のライフヒストリーが報告されている。申氏は、「奈良外国人保護者の会」に先立ち結成された「兵庫県在日外国人保護者の会」の創設メンバーの一人である。申氏の「語り」の中には、子どもの民族的アイデンティティの育成には、「保護者と教師の連携」の必要性が典型的な形で述べられている。「保護者の会」のバックボーンには、申氏の想いが共有されている。

以上が報告書の内容であるが、最後に、研究協力者である李和子氏にお礼申し上げたい。李氏は、「保護者の会」設立以来、１５年間、「保護者の会」の活動を一貫して支えてきたメンバーである。本研究を推進するために、李氏からは、貴重な資料の提供を受けたり、報告書の作成に協力していただいたりした。あらためて感謝申し上げたい。

研究組織：

研究代表者：　田渕　五十生　（奈良教育大学　教育学部　教授）

研究協力者：　李　　和子　　（奈良外国人保護者の会　いこま国際交流協会事務局長）

交付決定額（配当額）

	直接経費	間接経費	合計
平成１８年度	５００、０００	０	５００，０００
平成１９年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
総計	１、０００，０００	１５０，０００	１、１５０，０００

研究発表

田渕　五十生　明治図書　『”人権“をめぐる論争・争点と授業づくり』（２００６）

田渕　五十生　全関西在日外国人教育ネットワーク「子どもたちの作文が示唆するもの」『　届け！私の思いⅡ　ちがうことこそすばらしい！　子ども作文集』（２００６）

田渕　五十生　学事出版　「『教育』のある学校とは」　『総合学科の挑戦―神戸甲北高校キャリア教育の１０年』（２００７）

田渕　五十生　奈良中国帰国者支援交流会　「『中国帰国者』たちの声を聴き取ろうー」『遠かった祖国への道』（２００８）

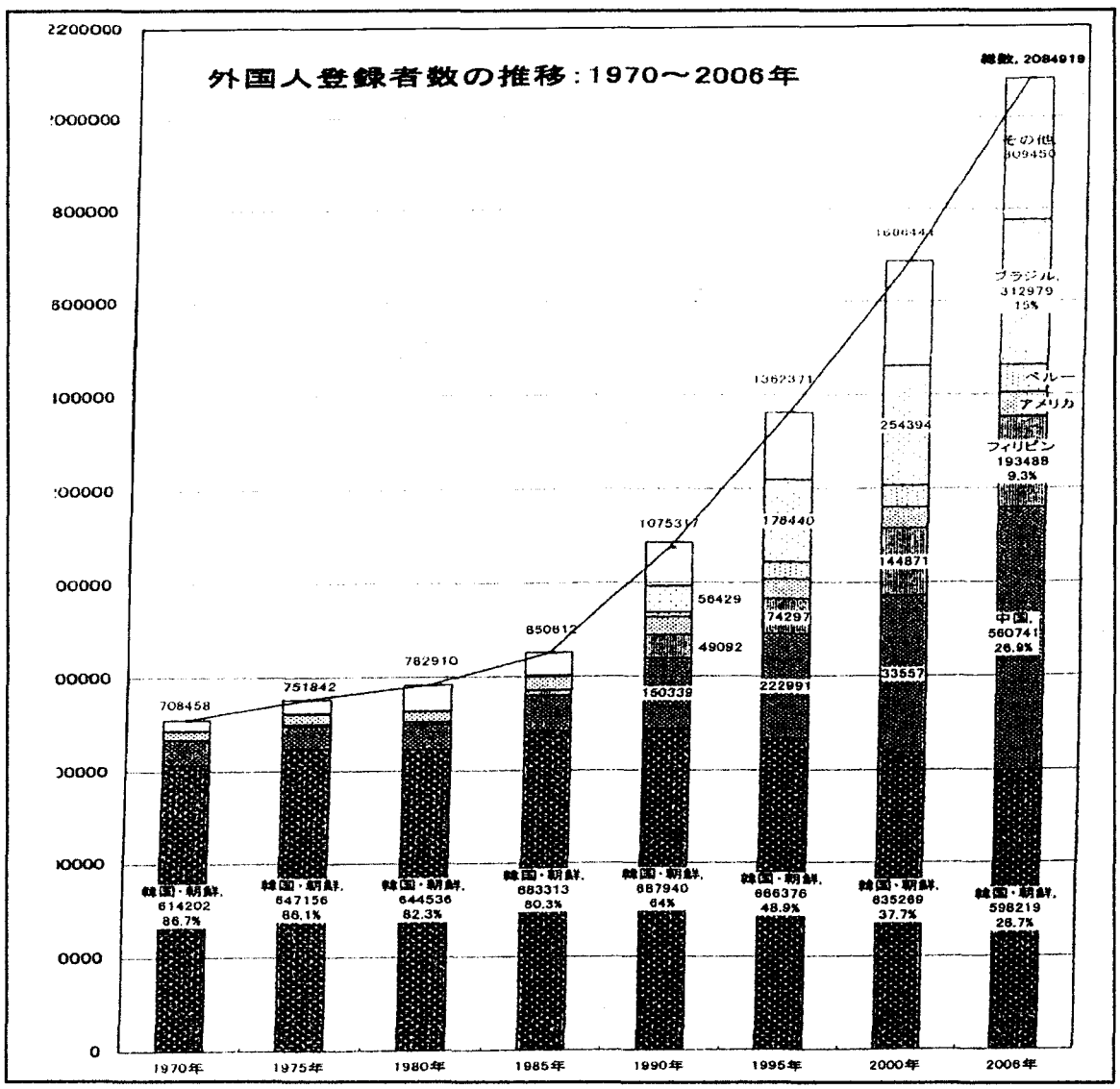
序章　多文化共生教育をめぐる状況と外国人保護者の役割

１．はじめに日本社会の民族構成の現状と課題

１－１多民族化する日本社会

資料１に示すように、日本には約２００万人の定住外国人が居住しており、構成比率は１．７％である。欧米に比べると、依然としてホモジーニアス(均質的)な社会であるが、近年の外国人の急増は著しくて、多民族社会、多文化社会は避けられ状況である。

＜資料１　外国人登録者数の推移＞



定住外国籍住民が増加する背景には、１９８０年代後半の円高・バブル・人手不足という経済的な要因がある。また、逼迫した労働力不足に対応した１９８９年の「入管法の改定」が南米や中国から日系人の人々を吸引することになった。さらに、国際結婚の配偶者として来航する者も増加の一途を辿っている。

定住外国籍住民を大きく類型化すると在日コリアン、中国籍住民（主として、残留婦人・

孤児とその呼寄せ家族)、南米からの日系人労働者、国際結婚の配偶者(アジアからの花嫁)にサブカテゴライズできる。<資料２参照>

かつて４０年前には、「外国籍住民＝在日コリアン」であったが、現在では相対的にも絶対的にも減少している。日本国籍を取った帰化者が増えたからである。また、３世・４世の結婚相手の９割は日本人で、１９８５年の「国籍法」の改正で「父母両系制」に改められた結果、生まれてくる子どもの国籍が殆ど日本籍になった。したがって、コリアン籍住民は減少しても・朝鮮半島にルーツを持つ人々や日本籍コリアンの人々が急増しているのである。

<資料２　全国の外国人登録者数>

①	韓国・朝鮮	５９８、２１９
②	中国	５６０、７４１
③	ブラジル	３１２、９７９
④	フィリピン	１９３、４８８
⑤	ペルー	５８、７２１
⑥	米国	５１、３２１
⑦	タイ	３９、６１８
⑧	ベトナム	３２、４８５
⑨	インドネシア	２４、８５８
⑩	インド	１８、９０６
	その他	１９３、５８３
	合　計	２、０８４、９１９

『在留外国人統計』（平成19年版

<資料３　奈良県の外国人登録者数>

①	韓国・朝鮮	５、１４０
②	中　国	３、０９５
③	ブラジル	８６４
④	フィリピン	５２５
⑤	米　国	３４４
⑥	ペルー	２４１
⑥	タイ	１７６
	合　計	１１、５５７

『在留外国人統計』（平成19年版

一方、中国籍住民は急増し続け、近い将来、在日コリアンを凌駕することが予測されている。その内訳は残留婦人・孤児とその呼寄せ家族、国際結婚の配偶者、留学生・就学生など多岐に渡っている。そのうち深刻なのは、残留婦人・孤児の人々の地域社会への適応と自己実現である。

もう一つのグループは、ブラジル、ペルーなど南米からの日系人労働者である。かつて「出稼ぎ労働者」として自動車産業を支えてきた。バブルが弾けると真っ先に解雇され、現在では土木作業、コンビニの弁当づくりなどの３Ｋ職場を埋める労働者として生活している。そして、日本社会への定住化が進んでいる。

最後のグループは「国際結婚の配偶者」が多数を占めるフィリピン人たちである。その後、中国人との国際結婚が第一位であったが、０６年滋賀県の長浜市での「同級生幼児殺

害事件」などの影響で、中国人との国際結婚が減少して、０７年度からフィリピン人との国際結婚が第１位になっている。国際結婚は究極の国際化」と言われるが、結婚業者が介在するなど、それとは逆な実態が見受けられるのである。また、生まれてくる子どもの教育問題も重要な課題である。なぜなら、周囲の偏見から、子どもたちが、母親を恥じたり自分のルーツを肯定的に受け入れられなる傾向が見受けられるからである。

ニュー・カマーの住民に共通するのは、「外国人の三つの壁」である。それは、「言葉の壁」、「制度の壁」、「心の壁」である。特に深刻なのは「言葉の壁」である。「外国人の医、職、住」という言葉に代表されるように、別の言語で自分の症状を医師に訴えるのは極めて困難である。サバイバルのための日本語教室など、彼・彼女たちを支えるサポートシステムの構築は地域社会の課題である。さらに、子どもたちの教育問題、特に小学校の高学年や中学校で来日した児童・生徒たちへの高校進学の「特別枠」などの制度的保障が必要である。言葉が分からないまま「お客さん」として在学した子どもたちに対して、日本人生徒と同じ試験を受けさせることがいかに、不公平で差別的であるか自明だからである。

一方、日本生まれの子どもたちの状況も看過できない。彼ら両親の文化資本（教育資本）は、限定されており、格別の配慮が必要である。そして、自分たちのルーツを肯定的に受け止める、民族的アイデンティティを育むことが求められている。それは、民族的、文化的背景の異なる子どもたちの「違いを違い」として受け止める、周囲の日本人児童・生徒の関係性の中で育まれるものである。

３．在日コリアン教育の軌跡

当初は、日本社会への「同化教育」であったが、その問題性に気づいた教師たちによって、在日コリアンを理解の対象に据えた教育が展開されるようになった。けれども、それは、いわゆる「異文化理解の教育」であった。日本人の「我々（We)」が、コリアンの「彼ら（They)」を理解する教育であって、同化か、そうでなければ排除する日本の学校文化そのものを相対化する視点は希薄であった。

教育内容について言えば、最初は在日コリアン形成の歴史的経緯を理解するカリキュラムが中心であったが、１９８０年代になると、「朝鮮との豊かな出会い」というスローガンが掲げられ、衣食住を含めて朝鮮文化を発達段階に則して学ぶ実践が展開された。当時は、「朝鮮文化への無知が朝鮮人蔑視を造り出す」（金素雲）状況があり、「内なる異文化」への理解を深めるカリキュラムが必要だったのである。

１９９０年代になると、日本人との関係性のなかでコリアンの子どもたちの民族的アイデンティティを育む教育が模索されるようになる。名前を民族的アイデンティティの象徴として捉え、「本名を呼び本名を名乗る」というスローガンが掲げられるようになった。そこには「本名を呼ぶ」という周囲の日本人側の課題も自覚されており、双方向学習が意図されていた。

４．ニューカマーの子どもたちの状況

１９８９年のいわゆる「入管法」の改定で、ニューカマーが急増し、学齢期の子どもは約１２万人に達している。そのうち、日本語指導の必要な子どもたちが約２万人、母語もポルトガル語、中国語、スペイン語と多国籍化している。ニューカマー子どもたちの置か

れた状況は、５～６０年前の在日コリアンの子どもたちに通底するものがある。中国帰国者の呼寄せ家族の子どもを例に考えてみたい。

佐藤が指摘するように、子どもたちは空間的、時間的、文化的に「分断状況」に置かれている。空間的には祖国からの分断である。自分の意志とは無関係に、しかも祖国の祖父母、親戚、友人など豊かな人間関係を断ち切って渡日している。いわば「植木の根切り」状態である。残念ながら、「言葉の壁」によって、家族は地域社会から分断され、子どもたちも学校単位で分断され孤立している。

時間軸においても分断されている。「なぜ、今、自分が日本にいるのか」という過去との分断である。親たちは、祖父母の世話や日本での生活設計など、それなりの決意を持って来日している。けれども、それが子どもたちに十分に伝わっていない。また、「将来、どのような生き方をするのか」という未来も描きにくい状況に置かれている。なぜなら、親たちの多くは「３Ｋ」の職場で働いて生活で精一杯であり、子どもの進路に対する情報も十分に与えられていないからである。

さらに深刻なのが、差別や偏見などの「心の壁」である。「中国人ピッキング」、「中国人マフィア」などプロの犯罪集団の犯行を、全ての中国人がそうであるかようにステレオタイプで報じるマスコミ報道が流し続けられている。このようなマクロな社会状況における情報環境が改められない限り、子どもたちの民族的な誇りを育むことは困難であり、ミクロな教室での実践が虚しく感じられるほどである。

5. われわれの教育課題

以上の状況から、我々の教育課題が明らかになってくる。彼らの「分断状況」をどのように「連結」し、エンパワーメントするかである。

第１は、学校単位で分断されている子どもたちに出会いの場を創出することである。仲間と出会うことで、「自分は一人ではない」と勇気づけられる。そこでは、親にも教師にも言えない悩みを、同じ境遇ゆえに打ち明けて理解し励まし合うことができる。そのような、子どもたちの組織化がエンパワーメントの秘訣である。

第２は、祖父母の歴史や祖国の文化と出会わせて「ルーツ」に繋げることである。そのためには、「満蒙開拓」や「文革時代」の迫害など、祖父母の体験した歴史や同伴帰国した両親の想いに触れさせる歴史学習が求められる。また、祖国の豊かな文化と出会う学習も必要である。いわば自分探しの問いを教科学習と連結して、その成果を周囲の子どもたちに発信していくことである。

第３は、「あのようなお兄ちゃんやお姉ちゃんになろう」というような、アイデンティティの対象になる人物（ロールモデル）と出会わせ、未来への展望を与えることである。

筆者は、中国籍の子どもが多数在籍している大阪府松原市立恵我南小学校の外国籍児童の教育に関わっている。そこでは、祖父母や両親への聞き取りを行い、クラスや学校全体に発表する歴史学習が展開されている。また、学校掲示の全てを２ヶ国語で表示し、運動会では中国語アナウンスも付け加えられている。日本文化への同化を強いるのではなく、学校を多文化化しようとしているのである。

さらに、教育行政も一体となって支援している。その一例が、市内に分散している外国籍の子どもたちを集めての海辺のキャンプで、遼寧省や黒龍江省など海を知らない子ども

たちに配慮しているのである。そこに大学進学したり社会人として活躍したりしている先輩がゲストスピーカーとして招かれている。その一人がＫ・Ｋさんで、大学院の博士課程で日中両文学の比較研究に従事する傍ら、夜間中学校の講師として中国帰国者の相談相手になっていた人物である。彼女の夢を実現するまでの体験や文学研究の面白さなど、子どもたちは瞳を輝かせて聞いたという。同じ立場の仲間に出会うだけでなく、ロールモデルにも出会える機会が、ニューカマーの子どもたちの教育には必要なのである。

６．外国人保護者の果たす役割

外国人の子どもの教育については、過去２０数年間「全国在日朝鮮人教育研究協議会」（２００１年から「全国在日外国人教育研究協議会」と改称）が中心になって、彼らの民族的なアイデンティティを育むためのカリキュラムや効果的な指導方法の開発が展開されてきた。また、そのような実践を保障する条件整備が教育行政によって推進されてきた。けれども、それらの実践が十分に成果を挙げることができなかった要因の一つは、外国籍の子どもたちへの教育実践が教師主導で行われて、外国籍の保護者との連携が行われなかったからである。

たとえば、在日コリアンの場合、民族的覚醒に迫る取り組みについて、保護者に了承了を得ようと家庭訪問を行っても、日本社会や日本人への不信感から、「もう帰化するので、その問題には触れないで下さい」とか、「子どもには、そっとしておいて下さい」とか、婉曲に拒否される場合が多い。その結果、より踏み込んで子どもの内面に働きかけをするのを躊躇するのである。

けれども、一見消極的な保護者の応答の背後には、「いいかげんな取り組みならばー」と言うメッセージが込められているのである。本当は、「差別に負けないで、民族的な誇りを持って成長して欲しいので、先生、なんとかして下さい」という叫びが喉の下まで出かかっているのである。しかし、コミュニケーション不足から、「民族教育の問題は、保護者の理解が得にくいことだ」考えて、「デリケートな問題なのだ」と即断して、それ以上の取り組みを中止してしまうのが一般的な状況なのである。

本来、民族的誇りやアイデンティティの育成は家庭の教育問題であり、保護者の責任で行われるものである。けれども周囲の差別や偏見から、日本名（通名）使用など、民族性（エスニシティー）を押し隠して、日本人のふりをしてしか、生きてこれなかったのが保護者世代の特徴である。それ以上に、民族学校で学んだ者を除き、保護者の大半が民族教育を十分に受けていないのである。さらに、大阪市や川崎市などの集住地区を除いて、コリアンの保護者たちは地域でも分散して居住しており、いわば校区ごとに分断された状況に置かれている。民族的な教育の必要性を痛感しつつも、どのように教育すればいいのか、孤立して悩んでいるのである。

そのような状況の中で、奈良県では１９９２年に「奈良外国人保護者の会」が組織されて、孤立した親が出会ってエンパワーメントされ、子どもたちに民族の言葉や文化に自然に触れる機会を提供する活動が約１５年間も継続して展開されてきた。奈良の経験は、全国の外国人教育のモデルになりうるものであり、今後、急増するニューカマーの保護者の活動のヒントになるものと確信している。そして、その要諦は、教師との有機的な連携でないかと思っている。

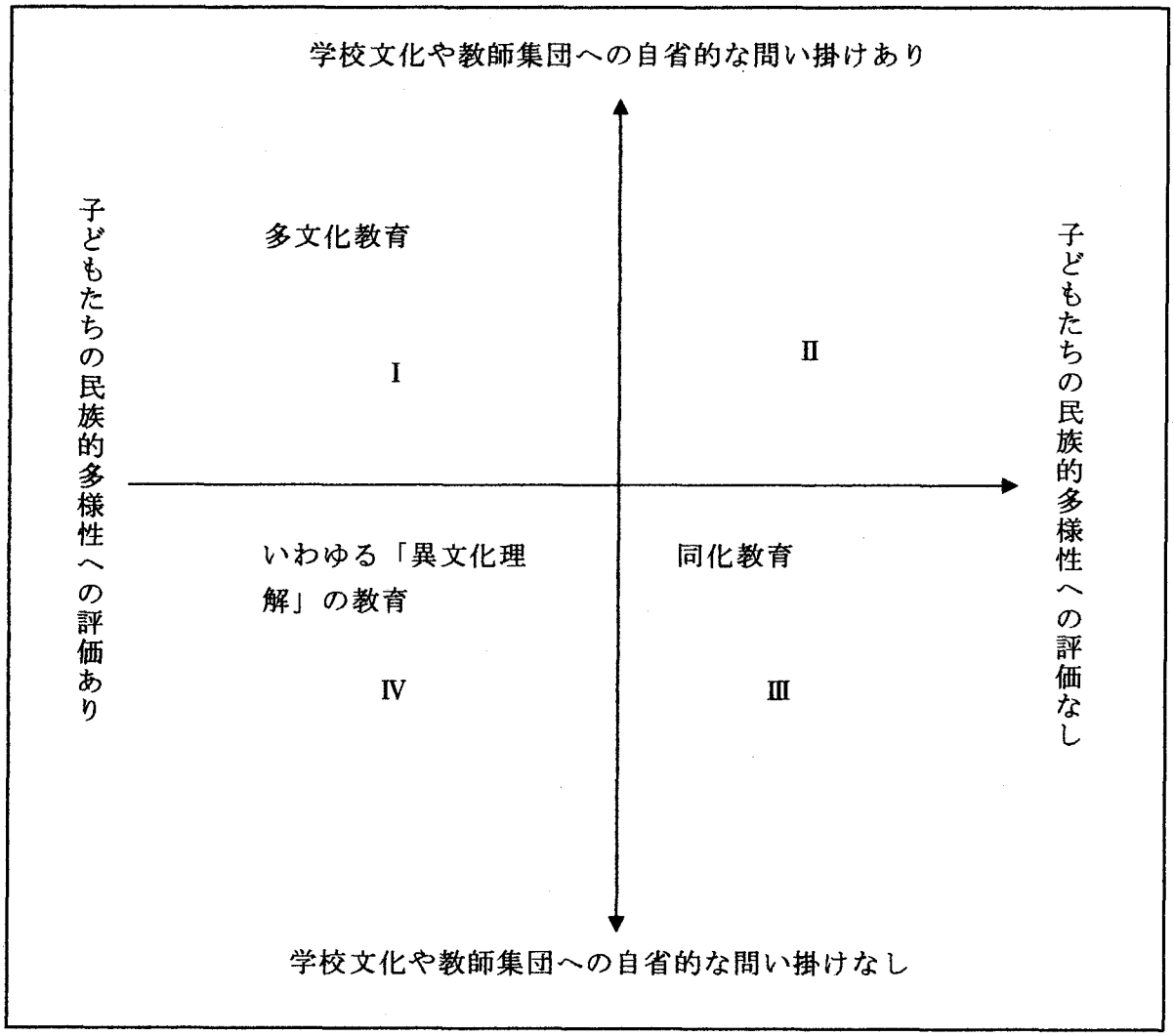
7．おわりに

多文化共生の教育を推進する教師には、次のような二つの視点ないし資質が求められると筆者は考えている。

一つは、対象とする子どもたちの民族的、社会的、文化的背景の多様性を認識し評価できるか否かである。二つは、教師集団がその社会の学校文化や教師文化を相対化する視点を有しているか否かである。そのような自覚がなければ、教師と子ども間、子どもと子ども間のインタラクティブな学びは成立しないだろう。

その二つの視点を分析軸にすると、次のような概念図を描くことができる。教師集団が、子どもたちの民族性や文化の多様性を肯定的に評価し、日本の学校文化の「隠れたカリキュラム」への自覚を持つのが第一象限で、多文化教育が可能である。その対極の第三象限がいわゆる同化教育で、文化的背景の異なる子どもたちは排除されるか同化を強いられるであろう。子どもたちの多様性への理解を示しても、自省的な問い掛けが希薄であれば、「彼ら（They）」を理解の対象に一方的に据える「異文化理解の教育」に終わるであろう。我々の課題は、どのようにして日本の教育を第三象限から第一象限に移行させるかである。

＜図１＞　多文化教育の概念図



第１章「奈良・在日外国人保護者の会」の活動とその意義

１．はじめに

在日コリアンへの教育は長い歴史を持ち，四半世紀にわたる実践史の中から，「本名を呼び，本名を名乗る」という実践のスローガンが紡ぎ出されてきた．それは，本名を民族性の象徴としてとらえ，コリアン児童・生徒には民族的なアイデンティティを育成し，その一方で，日本人児童・生徒には彼らの違いを違いとして尊重できる態度を育成しようとするものである．このスローガンの重要性は，「本名を呼ぶ」という課題を日本人側の児童・生徒に求めることと，「本名を名乗る」という課題をコリアン側の児童・生徒に求めることを連携させている点である．

コリアンの子どもが通名という「外套」を脱いで，本名を名乗るには，それを励ます教師の熱心な働きかけが必要である．また，それを承認する周囲の日本人の児童・生徒の許容的な雰囲気，すなわち支持的な学級や集団づくりが求められる．さらに，本名を名乗る子どもたちの保護者の協力と同意が必要である．けれども、保護者の重要性は認識されつつも，その具体的な取り組みについては，従来あまり報告されてこなかった．

全国で取り組まれた実践の中から優れたものが，「全国朝鮮人教育研究大会」で報告されてきた．それは，在日コリアンの教育に意図的に取り組んできた教師たちが，１９７９年に組織した「全国朝鮮人教育研究協議会」が，翌年から毎年開催しているものである．現在では，ニューカマーの子どもたちも視野に入れて，組織名も「全国在日外国人教育研究協議会」に，研究大会名も「全国外国人教育研究大会」に変更され，２００７年度で２８回を数えている．

そこで報告された多くは，教師が主体となっての実践が中心で，保護者たちによる実践報告は，過去の発表事例７２４中で以下の１２事例[(1)]にすぎない．

- 神奈川・オモニの会「ありのままの自分に誇りを持って－子どもを見守るオモニの会」1982年 1983年
- 川崎子供を見守るオモニの会「本名で生きることの意味」1984年
- 兵庫・在日外国人保護者の会「在日とわたしたち」　1991年
- 大田区オモニの会「大田区オモニの会と区教育委員会交渉」1992年
- 京都・メアリ会「メアリ会とわたしたち」1993年，「はじめの第一歩－シジャギ　パニダ」2002年
- 石川・セオリニの会「セオリニの会から学ぶこと」1996年
- 民族共生教育をめざす東京保護者の会「民族共生教育をめざす東京保護者の会の活動について」1998年
- 広島・在日コリアン安芸府中保護者会「Ｓの本名宣言－差別事件をのりこえて－」　1999年

・ 兵庫・保護者梁壽龍「共に生きる三田市民の会から三田在住外国人保護者の会設立まで」2001年
・ 日本の学校に通う子を持つアボジ・オモニの会「私たちにできることって何だろう？－親として，在日として」2002年

以上の発表は，いずれも個別の取り組みの実践報告が中心であり，保護者の活動そのものを対象化して民族的アイデンティティの育成との関係で論じたものは，管見する限り本稿がはじめてであろう．

本稿は，１９９２年に結成された「奈良・在日外国人保護者の会」（以下，「保護者の会」）の１５年間にわたる活動を報告して，児童・生徒の民族的なアイデンティティの育成に果たす保護者の役割について明らかにしようとするものである．いわば実践史の中から共有財産を析出しようとするものである．それらの考察は，その必要性が今後ますます求められる他の外国人保護者の組織化のモデルになるものと確信している．

まず，奈良県において在日コリアンがどのような状況に置かれており，保護者たちがどのような想いで「保護者の会」を結成したのかについて報告する．

次に，過去１５年間にわたって展開された「保護者の会」の活動について，略年表的に素描する．　さらに，「保護者の会」が組織的に取り組んだ主要な活動に焦点を合わせて，どのような実践が展開され，参加した児童・生徒が何を学んだのか，保護者の立場から詳しく報告したい．

最後に，民族的アイデンティティを育むために，「保護者の会」の活動がどのような意義があったのかについて考察すると同時に，どのような課題が残されているか明らかにしたい．

２．「保護者の会」設立の経緯と目的

２．１．奈良県における在日コリアンの状況

奈良県に在住する在日コリアンは２００６年末現在で５人である[(2)]．隣接する大阪・京都などの多住地域に比べて，その数は少数で，しかも分散している．定住に至る歴史は，１９１０年から３５年間にわたる植民地時代に，生活の糧を求め渡日し，鉱山や森林開発，ダム・トンネル・道路・河川工事などの過酷な労働に従事した人々とその家族の永住化にさかのぼる．１９４５年の解放後は、大阪のベッドタウン化による転入も増え，多様な在日コリアン社会が形成されてきた．

朝鮮半島から渡ってきた一世世代は，「祖国」に帰る日を夢みて，異国での厳しい生活に耐えて子どもたちを育ててきた．だが，日本生まれの二世・三世は，「祖国」は観念的にしかとらえることができず，日本に定住する意志を持って子育てをしてきた．地域や学校や職場で，根強い社会的差別と文化的同化の壁に取り囲まれている．かつては在日コリアンが密集する地域が奈良県にも少数点在していたが，現在ではそのような共同体もなくなり

つつあり，核家族化も進行している．このような状況から，在日コリアンの姿が，日本人だけでなく同胞同士からでさえ「見えない存在」となっている．

地域で孤立・分散している在日コリアン二世・三世の多くは，自らの文化や歴史について学ぶ機会がなく，民族的自覚を持てないまま成長した世代である．そして今なお，本名（民族名）が名乗りにくい困難な状況で子育てをしている．県下には奈良朝鮮初級学校が一校あるが，地域の公立学校に通う在日コリアンの子どもと保護者たちには，民族文化との出会いの場はほとんどなかったといえる．

２．２．「保護者の会」の設立の経緯

県下に点在している在日コリアンの子どもたちを結びつけ，自らの民族性をありのままに認め，民族的な自覚を育むため，まず保護者が相互に支え合う必要性から「保護者の会」が発足した．会が結成される背景には，同和教育の取り組みを発展させた在日朝鮮人教育の積み上げがあった．奈良県教育委員会は，１９８６年「在日外国人（主として韓国・朝鮮人）幼児・児童・生徒に関する教育指導指針」を策定した．これは全国に先駆けた画期的なもので，長年在日朝鮮人教育に関わった教師たちの強い要望によって実現したものである．

１９９１年には，「奈良県外国人教育研究会」（「県外教」）が，県内の保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教職員によって組織された．保護者たちのつながりは，在日外国人教育に取り組む教師との出会いから生まれたのである．１９９２年9月１３日，橿原市の大久保隣保館で開かれた結成総会には，在日コリアン保護者５０数名，外国人教育に関わる教師たち，合計１５０余名が参集した．翌日の新聞各紙[3]には，在日コリアン保護者や日本人教師たちの期待にふくらむ声が大きく掲載されている．

- 子どもには私たちと同じ苦しい思いはさせたくない
- 思いがあっても持っていく場がなかった．親たちが出会える場ができた
- 子どもたちが自分は在日韓国・朝鮮人であるとはっきり言えるような環境にしていきたい
- 県内では在日韓国・朝鮮人の子弟約千人が日本の学校に通っているが，自分の本名を名乗れないなど，子どもたちを取り巻く状況は厳しい．我々教師も保護者と交流を深め，問題の解決にあたりたい

「保護者の会」結成にともない，共に準備を進めてきた教師を中心に「奈良・在日外国人保護者とともに歩む会」（「ともに歩む会」）が１０月３日結成された．この会は「保護者の会」の活動を教師の立場からバックアップするために組織されたものである．

２．３．当初の活動と目的

結成直後，月一回、第３日曜日に定例会「モイム（集い)」を開いた．そこは何でも話し合える場で，様々な生き方の在日コリアンが，「子どもの教育」という一点で集まった．民族名のみの者，民族名と日本名の両方を使う者，４０年間本名を一度も呼ばれたことのない者もいた．日本国籍の取得者や国際結婚，韓国生まれの者もいた．

保護者たちは，これまでの自身の被差別体験，「民族」への思い，子育ての悩み・不安など，堰を切ったように語りあった．そこで語られた保護者の思いをいくつか紹介する(4)．

- いろんな話を聞いて，私の悩みもみんなの思いも同じだという事，そして，それぞれが頑張っておられることを知って力強いエネルギーをもらいました．
- 子どもは自分のことを日本人だと思っている．朝鮮人であることをどのように伝えたらいいのか．みなさんはどのように話されましたか．
- 私は子どもを本名で呼んでいます．でも日本に住んでいるので日本名で学校に通わせています．日本の学校には，何も期待していなかった．
- 子どもたちが受けているイヤな思いは，親が受けてきたイヤな思いと同じ．それは，社会がちっともかわっていないからじゃないですか．

多くの同胞と出会うことで，周囲の日本人と違う生活習慣，例えば雛祭りや七五三など学校で疎外感を感じたこと，自分の民族を否定的に捉え，民族性を丸出しにした祖父母を疎ましく思ったり恥たりしていたことが，私一人の「特別」なことでなく，われわれ世代に共通した被差別体験であったことを確認させられた．そして，「私と同じような気持ちを抱えている人がこんなにたくさんいるんだ」という仲間意識と連帯感を深めていった．

保護者たちは教師と本音で語り合う座談会を何度も開いた．教師から差別されたことはあっても民族を尊重された経験をほとんど持たない世代である．在日外国人教育に熱心に取り組む教師に出会い，保護者は教師に対する信頼を回復していった．そして，県内の在日外国人教育に関する情報収集と，意見交換を行った．

その過程で，保護者は次のような指摘を行った．在日コリアン教育では，①日本人児童生徒の多文化共生の資質を育成する教育と，②在日コリアン児童生徒の自尊感情の形成を支援しアイデンティティを確立させる教育の両方が必要である．しかし，②の在日コリアンの民族的アイデンティティを育む教育の実践報告は，県内では殆ど行われていないのではないかという問題提起である．

その課題は，民族的自尊感情の形成が阻害されてきた二世・三世世代の保護者にとっては切実な問題であった．例えば，「モイム」参加者たちは，子どもに通名をつけた理由として次の二つをあげている．一つは，民族差別と偏見から子どもを守るためである．二つ目は，保護者自身が民族の言葉も文化も知らず，自然に通名を選んだというものである．こ

のような通名使用の理由は，京都大学教育学部比較教育学教室の報告[5]とも一致している．

モイムではまず，差別や偏見を生みだしてきた歴史的経緯や社会的背景などについての学習会（全４回）と人権学習会（全６回）を持った．歴史学習は驚きの連続であった．中国や日本に侵略されるだけの弱小民族というイメージから，固有の歴史と文化を発展させてきた独自の民族であるというイメージに一変した．同時に，民族楽器や踊り，韓国料理の民族文化講習会も開いた．民族文化との出会いも，われわれ保護者を勇気づけ，民族への「誇り」を育むのであった．朝鮮民族のこのような豊かな文化にもっと早く出会っていたなら，民族的な劣等感や虚無感に陥らなく成長できたという後悔と喜びがない交ぜになった感動であった．

この感動を伝えるために，月に１回，会報を発行し，モイムに参加できない保護者とも情報交換の場をつくった．そのような活動を通して，子どもたちの教育問題の主体者として，力を結集する必要性を自覚していった．

現在，次の三つを「保護者の会」の目標として活動を進めている．

一，　県下全域に分散する在日コリアンの保護者と子どもたちをつなぎ、親睦と交流の輪を広げる

二，　子どもたちが自らの言語、文化及び歴史を学び、民族としての自覚と民族的独自性を維持できる教　　育を確立する

三，　外国人住民と日本人がお互いの文化や歴史について理解し、認め合って共に生きる多文化共生社会に貢献する

３．「保護者の会」１５年のあゆみ

３．１．「保護者の会」１２年間の活動記録

以下に、保護者会１２年の歩みを略年表的に素描し，その全容を報告したい．

９２年９月　結成総会　橿原市大久保隣保館　１５０名

９３年６月　パンフ「ウリマダン（私たちの広場）」発行

８月　第１回オリニ・サマーキャンプ（以下オリニキャンプ，オリニは韓国語で子どもという意味）大和郡山市立少年自然の家
参加者数：１００名（幼小中学生 51 名）

９月　１周年集会　橿原市大久保隣保館１００名自主ビデオ「保護者の会１年の歩み」上映

９４年１月　生駒市市長選全候補者に定住外国人施策に関する公開質問状を提出
（以後、各市長選挙時に公開質問状を提出）

８月　第２回オリニキャンプ　大和郡山市立少年自然の家　１２５名（幼小中 51

名、日本人児童27名、保護者・教師47名）

９５年８月　第３回オリニキャンプ　生駒山麓公園野外活動センター　２０１名（幼小中56名、日本人児童59名、保護者・教師86名）

９６年７月　橿原オリニ会発足　於：橿原市立新沢小学校
参加者：オリニ６名、保護者・教師２４名

８月　第４回オリニキャンプ　生駒山麓公園野外活動センター
参加者：１４０名（幼小中高67名）

１０月　生駒オリニ会発足　於：生駒市図書会館
参加者数：オリニ１１名、保護者６名

９７年８月　第５回オリニキャンプ　奈良市青少年野外活動センター
参加者：１５８名（幼小中高70名）

９月　５周年記念フォーラム「生きる力となる教育を求めて」於：生駒山麓公園ふれあいセンター　参加者：約１００名

１１月　第１回オリニ・フェスティバルＩＮなら於：奈良県社会福祉総合センター
参加者：約２００名

９８年４月　５周年記念フォーラム報告集　『生きる力となる教育を求めて』刊行

８月　第６回オリニキャンプ　奈良市青少年野外活動センター
参加者：１６３名（幼小中高68名）

１１月　第２回オリニ・フェスティバルＩＮなら於：橿原市立畝傍北小学校体育館
参加者：約３００名

９９年８月　第７回オリニキャンプ　於：生駒山麓公園ふれあいセンター
参加者：１１０名　ユースキャンプ　４１名

１１月　第３回オリニ・フェスティバルＩＮなら

００年８月　第８回オリニキャンプ／ユースキャンプ

１０月　第４回オリニ・フェスティバルＩＮなら

０１年８月　第９回オリニキャンプ／ユースキャンプ

１０月　第５回オリニ・フェスティバルＩＮなら

０２年６月　１０周年記念連続セミナー開催

８月　第１０回オリニキャンプ／ユースキャンプ

１０月　第６回オリニ・フェスティバルＩＮなら
１０周年セミナー報告集『輝く瞳』刊行

０３年８月　第１１回オリニキャンプ／ユースキャンプ

１０月　第７回オリニ・フェスティバルＩＮなら

０４年７月　第１１回オリニキャンプ　１２４名　ユースキャンプ　４８名

１０月　ウリ・フェスタなら２００４（第８回オリニフェスティバル）

於：奈良市立鼓阪小学校講堂　参加者数：約３５０名

０５年６月　第９回多文化共生教育フォーラム　～「在日」の家族写真～

於：生駒市コミュニティセンター　参加者数：６０名

７月　第13回オリニキャンプ　於：生駒山麓公園ふれあいセンター

参加者：オリニキャンプ　１３０名　ユースキャンプ　３０名

１０月　ウリ・フェスタ・ナラ　２００５　於：奈良市立鼓阪小学校講堂

参加者：約２５０名

０６年６月　第10回多文化共生教育フォーラム　「民族的アイデンティティを育む教育を求めて」～保護者会活動の意義と役割～於：橿原市公民館　参加者：５０名

７月　第14回オリニキャンプ　１０９名　ユースキャンプ　２７名

１０月　ウリ・フェスタ・ナラ　２００６　於：奈良市立鼓阪小学校講堂

参加者：約２５０名

０７年４月　橿原オリニ会　年３回から毎月第４土曜日の開催に変更

生駒オリニ会　資料映像「生駒市の多文化共生活動のあゆみ」作成

６月　特定非営利活動法人いこま国際交流協会　設立

７月　15周年記念「第11回多文化共生教育フォーラム」

一部　映像「保護者会15年のあゆみ」　保護者・ユース共同制作

合唱「♪故郷の春　♪アプロ」　橿原オリニ会・生駒オリニ会

特別報告「海外同胞の教育政策」　李俊衡韓国教育院院長

サムルノリ　奈良ユースのみなさん

二部　パネルディスカッション「地域で育てる多文化教育」

於：帝塚山学園　３号館4F視聴覚室　参加者数：１８０名

８月　第15回オリニキャンプ　114名（オリニ45名、保護者･教師６９名）

ユースキャンプ　40名

１１月　奈良コリア文化の集い（ウリ・フェスタ・ナラ2007）

民団奈良県本部・韓国教育院・「保護者の会」三団体主催事業

於：東大寺金鐘会館　参加者：約３００名

０８年３月　ikoryu音楽祭　（生駒オリニ会･橿原オリニ会･ならユース参加）

主催：特定非営利活動法人いこま国際交流協会

於：生駒市コミュニティセンター　参加者：約３５０名

以上列記した１５年にわたる会の活動は，大きく３つの時期に分けることができる．結成から５周年までがむしゃらに走り続けた創成期，５周年から１０周年まで軌道に乗った発展期，１０周年以降の世代交代が進む転換期である．以下，それぞれの特徴を記述する．

３．２．創成期（結成から５年目まで）

まず，第１期は，在日コリアンの子どもたちへの理解を深める時期，すなわち足場固め

の時期といえる．①教育環境を改善する行政への取り組みと，②子どもたちをつなげる取り組みについて報告する．

3．2．1．行政への取り組み

前項で紹介しているように「保護者の会」の結成時は外国人教育を推進する「追い風」の時であった．なぜなら，県教委が「指導指針」を策定し，教職員も「県外教」という推進機関を結成していたからである．

しかし，その一方で「誰が在日コリアンかわからない」という実践における初歩的な陥穽が存在していた．子どもたちの本名が小・中学校の９年間，指導要録などの公簿類に記載されていなかったのである．県教委の「指導要録は、小・中学校では，原則として学齢簿の記載に基づいて記入する」という指導にもかかわらず，一部の地教委は通称名がある場合は通称名だけで書類を作成して，就学案内を送っていたのである．さらに，小学校に通知する就学予定者リストにも通称名のみを通知し，保護者の申し入れがあれば本名に変更できるものとしていた．つまり，保護者の直接の申し出がない限り，学校に届く以前に本名が消され，指導要録が作成されていたのである．

「保護者の会」は，まず生駒市と交渉を行った．本名を勝手に抹消する市教委の姿勢は責任放棄であり，差別と偏見に基づいた行為であると指摘した．教師たちの同じような指摘に対しては無視していた市教委も，当事者である保護者の訴えには耳を傾け，見直しを始めた．

その結果，公文書への本名記載（通称名がある場合はカッコ付きで記載）が県下全域で徹底されるようになった．また，多くの自治体が，入学案内時に，地教委の在日外国人教育に対する姿勢を明記した「本名で就学されることを願っています」という本名入学を呼びかける案内文書を出している．これは，本名入学の選択肢を保護者に委ねるだけでなく，「指針」に沿った教育環境の整備の責任が行政にあることの確認である．

本名使用においては，当事者の意志が尊重されるべきであるが，本名を名乗れる環境づくりは行政の責任である．そのことを行政に自覚させ，本名が消され「見えない存在」となっていた在日コリアンの子どもたちを「見える存在」にしたことは「保護者の会」の大きな成果である．

3．2．2．子どもたちをつなげる取り組み

民族教育（＝自分を知る教育）の原動力になったのは「見えない存在」から「見える存在」となってきた子どもたちである．民族キャンプや民族子ども会で，「民族名」を呼び合い生き生きと活動する子どもたちの姿を目の当たりにして，教師と行政職員の意識は確実に変化していった．そして，保護者も子どもと共に成長していった．次に紹介するのは，「一周年の集い」に参加した橿原市在住保護者の発言の一部である[6]．

家族全員がこの一年間で民族と向き合えるようになってきました．そして，末娘がま

ず本名を名乗りました．その子を見て，私たち夫婦も本名を取り戻しました．今のままでは，これからの人生はからっぽの上に乗った人生違うやろかと思ったからです．子どもの前を一歩ではなく半歩でもいいから歩いて，道しるべを残してあげたい．娘は，今，朝鮮人であることに喜びを持っています．私たち親は，自分が朝鮮人である喜びに気づくこともできなかった．一人でも多くの保護者に民族と出会って欲しいです．先生方，私たち保護者を出会わせて下さい．

最初に変化したのは子どもたちである．親と一緒にモイムに参加して，同胞の友だちに出会い，本名で呼び合う過程で，本名を名のりたいという子どもたちが次々に出てきた．前述の保護者の子どもの場合，小２の時，学校で自分の本名をハングルで大きく書き，担任を当惑させ，どのように対処すればいいか担任も保護者に問い合わせを行った．それに対して保護者は，「娘の気持ちを大切にしたい．本名を使いたいのならそれでもいい．けれども，周りの友だちがどのように受け止めるか心配だ」と答え，学校全体で真剣に受け止めてくれることを望んだ．翌年には長男が，続いて次男が，それぞれ自分の意志で本名を名乗った．そして，他にも本名で学校に行きたいという子どもたちが出てきたのである．

子どもたちの気持ちを真摯に受け止め，つなげていく責任が保護者にあると考え，子どもたちを対象にした民族教育活動を始めていった．まず，「保護者の会」と「ともに歩む会」から実行委員を選び、何回も準備会を持ち，結成翌年の８月に「オリニサマーキャンプ」を開催した．はたして参加者があるか危惧したが，それも杞憂に終わり，オリニ５１名が集まり，多数の保護者，教師も参集した．二日間のプログラムは以下の通りである．

一日目	・ハングルの基礎学習
	・イルム（名前）のプラバンづくり
	・朝鮮の歌や遊びの学習
	・キャンプファイヤー
二日目	・タル（仮面）づくり
	・民族楽器（チャンゴやソゴ）の練習

オリニキャンプにより多くの参加者を集めるために，
①県・地教委，教育研究団体，同胞団体などの後援と支援を取り付ける，②各市の広報紙にキャンプの案内を掲載させる，③学校を通じてキャンプの案内を対象家庭に届けるという取り組みを行った．現在，①と②は実現しているが，③については，地域格差があり，教師の無理解から保護者の手元に届かない学校が今なお存在している．

次に，キャンプに毎年参加する子どもたちを地域でつなぐために，奈良市・生駒市・香芝市・橿原市・大和郡山市・大和高田市・生駒郡の各ブロックにそれぞれ代表を置いた．

相互連携しながら地域に密着した活動を展開し，子どもたちの交流を日常化するためである．

３．２．３．５周年セミナーの開催

結成から５年目，１９９７年９月１５日生駒山麓公園ふれあいセンターで「保護者会結成５周年記念フォーラム」を開催した．

「保護者の会５年の歩み」の自主ビデオ上映後，「生きる力となる教育を求めて」というテーマでパネルディスカッションを行った．「保護者の会」，「ともに歩む会」．「県外教」のそれぞれの代表者が，５年間の活動を総括的にふり返り，参加者全体で熱心な討議が行われた．

「ともに歩む会」の初代代表の山中憲司氏は「僕は，この保護者の会と関わる前，在日朝鮮人教育をやっているといいながら,在日朝鮮人というレッテルと関わってきたと思う．金さん，李さん，一人ひとりと関わって学ばしてもらった．民族と出会いをさせると言ってきたが，出会いだけではあかん，やっぱり，民族を取り戻すことを保障しないといけないと思っている」と述べ[7]，民族教育権の確立を教師の立場から提言した．これは，保護者との協働作業を通して深められた認識であり，具体的な固有名詞を持つ人との連携の重要性を示唆している。

県教委からも来賓挨拶の中で「保護者の会の活動を大きな地域の教育力としてとらえ、本年度からオリニサマーキャンプの後援している」という言葉[8]とともに，多文化共生能力の育成に保護者の会の存在は不可欠であったという評価を得た。

このセミナーで，保護者，教師，教育行政それぞれの主体的な活動を評価・認知して，協働活動する必要性が確認された．また，保護者の自立的な民族キャンプやオリニ会活動が地域の教育力として多文化教育を推進する一つの形態だという評価も得た．

いうまでもなく在日コリアンの子どもたちの民族的アイデンティティは，社会教育と学校教育の双方で育んでいくものである．その両者を統一した教育はまだ十分に達成されていない．公教育における民族教育権の確立という課題は残ったままである．

３．３．第２期　発展期（５年～１０年目）

「保護者の会」の活動が，周知されるようになった５年目以降は，それぞれ地域に重点を置いた活動へと移っていった．第２期（１９９７年～２００２年）は，地域活動を活性化し，地域で民族教育が自立的に展開された時期といえる．以下，主要な二つの取り組みについて報告する．

３．３．１．地域のオリニ会活動

１９９６年７月，「保護者の会」橿原ブロックの保護者たちは「橿原オリニ会」を立ち上げた．続いて，同年１０月には，生駒ブロックの保護者たちが，「ウリマル教室」を開設した．後に，「生駒オリニ会」と改称し，子どもたちが共に学び合える拠点になっていった．現在，県内に二箇所しかないため，北部地域は「生駒オリニ会」に，南部地域は「橿原オ

リニ会」に参加している．オリニ会活動は，各自治体でも評価され，橿原市，生駒市からそれぞれ助成金を受けている．

地域社会の中で，オリニ会活動を継続することの意味は大きい．その意義として民族教育活動に以下の３点で有益である．

① 日常の生活圏内で活動ができる

② 地域社会とつながった活動ができる

③ 地域の実状に合った活動ができる

生活圏に活動拠点がある意味は大きい．子どもたちの日常生活にオリニ会活動を組み込むことで，民族教育が「特別なこと」でなく「普通のこと」として肯定的に考えられている．また，オリニ会は市民文化祭や地域の祭りなどの地域諸活動に積極的に参加しており，外国人住民が地域で生き生きと民族性を表現し，周囲の日本人と交流する機会となっている．さらに，オリニ会の構成メンバーは地域により異なっており，年齢，出自，国籍など，一人ひとりの子どもの属性を尊重し、地域の実態に合わせた取り組みが可能になっている．

３．３．２　自治体との協働

民族教育は，保護者の熱意だけでできることではない．

保護者をとりまく社会意識を変化させ，民族教育を自治体の教育課題と位置づける「教育指針」が必要である．外国人教育に関する「指針」のない自治体には策定を促す活動を展開した．その結果，現在，県下の１１市中８市で外国人教育を推進するための「指針」が策定されている．その内，「保護者の会」の会員が参加してつくったのは，大和高田市（１９９６年），奈良市（１９９７年），大和郡山市（１９９９年），橿原市（１９９８年），生駒市（２０００年）である．すでに策定している自治体には「指針」に即して具体的取り組みを促していった．策定後，生駒市では，「生駒市外国人住民教育推進懇話会」が設置され，「指針」の進捗状況や課題が当事者も参画して検討されている．

３．４．　第３期　転換期（１０年目から現在まで）

結成から１０年が経過して，現在，「保護者の会」の活動は転換期を迎えている．この１０年間，夏の「オリニサマーキャンプ」と秋の「オリニ・フェスティバル」，地域オリニ会活動，そして，学校や地域，行政機関への協力，参画など，「民族的アイデンティティを育む教育の確立」と「多文化・多民族共生社会の実現」をめざす活動を多方面にわたって進めてきた．その間の主要な取り組みと課題について報告したい．

３．４．１．１０周年記念セミナー

過去の活動をふり返り，今後の方向性を見出すため１０周年事業の一環としてセミナーを開催した．在日の過去に学び，今日をふまえ，明日を開くという意味から，３回の連続セミナーを企画した．以下，それぞれの内容を紹介する．

第１回「ハルモニから学ぶこと」６月９日，桜井市

在日コリアン二世の女性二人をゲストに招き，ルーツ，生活の様子，差別と闘った実体験，そして次世代に対する願いや思いを学ぶ集会を持った．

第２回「ウリならしゃべり場」６月２３日，橿原市

１０年前にはオリニ（子ども）であったユース（青年）のメンバーから，民族，日々の葛藤，将来への希望，さらには結婚観など，若い世代の声を多方面から聞いた．ユースメンバーが，企画から準備，進行，報告集まで全てを担当する画期的なセミナーとして注目された．

第３回「民族教育の確立，豊かな多文化共生社会の実現をめざして」７月２８日，生駒市

記念講演　金東勲龍谷大学教授「多文化が共生する地域社会と外国人教育」

パネルディスカッション　保護者，日本人教員，民族教育関係者の３人をパネラーに招き，保護者会活動の実践や「外国人住民教育指針」策定経緯，さらに今後の「民族教育の制度保障」に向けた提言など，「多民族、多文化共生社会の実現」に向けた，内容豊かなパネルディスカッションを開催した．

３回にわたるセミナーは，日本における民族的、文化的マイノリティーが自己の民族性や文化を継承する意義を確認する内容で，我々「保護者の会」のメンバーに知恵と勇気を与えるものであった．

３回のセミナーをまとめた報告集『輝く瞳』2000部を作成した．小冊子であるが，奈良県の外国人教育実践の一助になると確信している．

３．４．２　多様化する在日コリアン教育

結成以後１０年経過し，在日コリアン保護者の世代交代が進み，子どもたちの国籍やエスニティも多様化している．

日本国籍取得者が年々増え，１９５２年から２０００年まで累計で２４万人，１９９５年以降は年間１万人前後が「帰化」している[9]．さらに，日本人と「国際結婚」するケースが年を追うごとに増加しており（１９９０年以降、韓国籍者の８０％以上が日本人と結婚），その結果，日本人と在日コリアンの「ダブル」の子どもたちが増大している．また，韓国では１９９０年代に入り，海外への渡航が自由化され，留学や就労，結婚などの形で日本にやってくるニューカマーの韓国人が増大している．このように，「韓国・朝鮮」籍を保持する在日コリアンの減少，日本国籍取得者（帰化者）と「ダブル」の急増，そしてニューカマー韓国人の増大など，在日コリアン社会は多様な人々で構成されるようになり，奈良の地域にも現象している．

その傾向は，オリニキャンプやオリニ会の参加者にも如実に現れている．１２年前の第１回オリニキャンプでは，日本国籍やダブル，ニューカマーの子どもたちは希少であった

が，年々増加し，現在では半数近くを占めるようになってきた．在日コリアンの子どもたちの国籍，出自，文化，言語が多様化している現状をふまえた教育実践が求められている．

４．保護者会の活動実践について

１５年間にわたっての「保護者の会」の活動について報告してきたが，会の活動は大きく４つに分類できる．第一は，オリニの民族教育に関わる諸活動．第二は，地方自治体，教育行政，学校への働きかけと連携．第三は，地域の国際理解，国際交流事業への参画と学校現場に出掛けての国際理解教育，人権教育への貢献．第四は，出版活動である．以下，それぞれの項目について詳述したい．

４．１．民族教育活動として次の４点を重点的に行っている．

４．１．１　夏季キャンプの実施

小学生を対象にした保護者同伴の「オリニサマーキャンプ」（一泊二日）を 1993 年から，中高生を対象にした「ウリならユースキャンプ」（二泊三日）を 1999 年から毎年，実施している．関心のある日本人教師も加わり，例年１５０人規模に達する，子どもたちと保護者が一堂に集い，保護者たちは子どもたちの教育について本音で語り合って親睦を深めている．

一方，子どもたちは，民族の言葉や名前（民族名）の読み方を学び，本名で呼び合って民族的な自覚を持ち，同じ立場の子どもたちがいること，そして自分たちは一人ではないという連帯感を実感している．

中高校生・青年たちは，大阪市で民族教育に関わる民族文化指導講師の青年たちを通して，在日コリアンの人権問題や日本と朝鮮半島の歴史を学んでいる．また，民族楽器の演奏や民族舞踏を学び，キャンプの最終日にその成果を披瀝している．

小学生は，民族楽器で民族舞踏を勇壮に踊るお姉さんお兄さんたちを見て，「中学生になったらあの仲間に加わることができる」という希望を持つようになっている．

以下，キャンプに参加した子どもの感想文の一部を紹介する．

- キャンプファイヤーがたのしかった．だって中学生と大学生が，チャンゴをやってたからすごいなとおもった．わたしもやってみたいとおもった（小２）
- はじめて参加して，はじめて会った友だちとも仲よくできてうれしかったです．また来年も来たいです．かんこくのがっきもむずかしかったけど，リーダーに教えてもらってうまくできました（小５）

中高生たちは，言葉や民族文化を身につけた民族講師の青年たちに，アイデンティティ

の対象を発見している．中学２年の女子生徒は、感想文に次のように記している．

夜の交流会で，リーダーの二人が，自分が本名を名のるか名のらないかの心境を話してくれた．その時は，自分のこととかはしゃべらんかったけど，話が聞けてヨカッタと思う．

オリニキャンプやオリニ会を卒業した青年たちが集まって，「中高生青年グループ」を作り，「ウリならユースキャンプ」を企画している．かつて小学生であったオリニたちが，自らの力でキャンプを運営し，年少のオリニたちの指導をしている．この会は，親にも話せないことでも，何でも話し合え，同じ立場の青年たちが励ましあえる居場所である．この会を通して，学年を超えた繋がりが生まれている．

このように，民族キャンプ活動を毎年開催することで，同年代の横の世代と異年代の縦の世代のつながりが生まれ，その時空間が彼らのアイデンティティを育む絶好の機会になっている．

次に，奈良県の人権作文集(10)に掲載された中学生の作文を紹介する．いささか冗長であるが，キャンプの雰囲気が伝わってくるので全文紹介したい．

夏休みの思いで　生駒市立中学校２年　金＊＊

８月２日３日韓国人の子どもたちのキャンプに参加しました．僕は，小学校４年生から参加して，今年で５回目です．小学生の時は，朝鮮の遊びやことばを習ったり，工作をしたり楽しいキャンプでした．友だちもたくさんでき，毎年会うのが楽しみです．中学生になると，遊びや勉強だけでなく，中高生の交流会があります．今年は，中高生が１７人でいろいろな話をしました．

僕が一番印象に残ったのは，名前のことで，全体の３分の２は日本の名前で学校に行っているそうです．僕も昔は，日本の名前もあったらいいなあと思っていました．小学校の低学年の頃は，自分の名前を言うのがはずかしくて，つい下を向いたり，声が小さくなったりしてしまいました.そんな時は,「日本の名前もあったらちゃんと言えるのになあ」と思ったものでした．

けれども，今は日本の名前など必要ないと思っています．毎年夏に行われるこのオリニサマーキャンプなどに参加することで，本名を力強く名乗るなかまがたくさんいることを知ったからです．みんな自分の名前に，そして自分自身に誇りを持っていて，堂々として見えました．そんな仲間との出会いを重ねているうちに，僕も少しずつ変わってきました．今では，胸をはって堂々と自分の名前をいうことができます．

日本の名前を名乗っている人たちは，朝鮮の名前をこの時だけ使っていたり，なかには父親か母親が日本人で日本の名前しか持っていないので，朝鮮の名前が欲しいという

人もいました．

僕は，みんな自分の名前で学校に行ってほしいと思います．僕は生まれたときから本名でしか生きていないからよくわからないけど，同じ韓国人として，本名で生きていくことの意味や，本名を持ちながらなぜ日本の名前を使うのかをこれから考えていきたいです．

金君は，日本名もあればいいと思っていたが，仲間に出会うことで「必要ない」と思ったとふり返っている．同じ立場の仲間に出会うことで，自分自身を相対化する視点が与えられると共に，他者の立場に思いを馳せることができるようになっている．この作文にはそのような内実が語られている．この作文に勇気づけられたのは彼の両親である．在日二世の保護者は，自分たちのように「朝鮮」を隠して学校に通わせたくないと本名で通学させていた．しかし，小学校高学年の頃「日本の名前ないの？」とふと漏らした子どもの言葉に心を痛めていた．この作文を読んだ保護者は，子どもの成長に安堵し，やはり親だけでは子どもは育たないことを実感したという．やはり，子どもの視野の拡大には同じ立場の仲間が必要なのである．

キャンプに参加した保護者と教師たちは，子どもたちが生き生き活動する姿から，以下に紹介するように多くのことに気づかされている．

- 今回初めての参加だったのですが，本当に楽しい二日間でした．また来年も来たいなと心から思いました．いろいろな体験を親子でできたこと，感謝しています（保護者）
- 学校では毎日顔を合わしているはずなのに，民族楽器（チャンゴ）を楽しそうに，汗をかきながら演奏している○○の生き生きした笑顔を初めて見たような気がした（教員）
- このような民族と出会える場が，保護者の思いとともに，公教育の場でもきっちりと位置づけられたらと思いました．微力ながら力添えしていけたらと思っています（幼稚園保母）
- 今回で３回目の参加になりますが，今回は，学級の子どもと来ることができませんでした．来年は，ぜひとも子どもたちと参加したい（中学教員）

以上のような感想は，キャンプに参加した子どもたちの間で仲間の教育力が発揮されていたことを如実に物語っていよう．

４．１．２．「ウリフェスタ・ナラ」（旧称「オリニ・フェスティバルｉｎなら」）の実施

１９９７年から毎年，在日コリアンの子どもたちの民族文化祭を実施している．開催主旨は次の４つである．①夏季キャンプだけでなく秋に文化祭を開いて出会いの場を年２回に増やす．②地域のオリニ会の交流の場にする．③学習成果の発表の場をつくり学習の励

みにする．④地域に民族文化を発信し多文化社会であることを示す．

当初小学生だったオリニたちがユース（中高生・青年）となり，オリニという名称と実態がそぐわなくなってきた．そこで２００４年，名称を改め，多文化共生社会を目指すマダン（広場）として再出発した．参加者も年々増えて，２００４年度は３５０人に達している．

奈良朝鮮初級学校にも参加を呼びかけ，朝鮮学校と日本学校，それぞれの在日コリアンが交流する機会となった．また，地域住民に参加を呼びかけて，日本人との交流の場にもなっている．以下は，その時のプログラムである

・　オリニ会文化発表
　ソルチャンゴ（長鼓）　　橿原オリニ会
　民話劇「ホランイ（トラ）よりこわい干し柿」
　　生駒オリニ会
・　奈良朝鮮初級学校（友情出演）
　民族楽器重奏、朝鮮舞踊、民族打楽器
・　サムルノリ　　高麗会と保護者の会有志
・　大型絵本「こいぬのうんち」　奈良教員有志
・　スペシャルプンムル　　ウリならユース
・　ノリマダン（朝鮮の遊びの広場）
・　はるさめチゲを食べよう

「オリニ会」の子どもたちは，民族講師と一緒に，チャンゴ（長鼓）や，チュム（舞踊）ウリマル劇（韓国語劇）などを練習し，大勢の人たちの前で発表して達成感を味わい自信を深めた．

ユースのメンバーは，夏のキャンプ活動をさらに発展させ、多彩なプログラムを企画して，地域住民に自分たちの文化を積極的にアピールしている．

また，この「ウリフェスタ・ナラ」は，オリニ会活動を地域住民に知ってもらう機会にもなっている．多文化教育の絶好の機会と捉え，子どもだけでなく，ＰＴＡにも積極的に参加を呼びかける学校もあった．クラスの友だちを誘って来たオリニは，民族的アイデンティティを認める友だちがいることを自覚して，教室でも安心して自分の民族を表現できるようになるのである．

日本人教師は，「総合的な学習の時間」に取り組んだ教育実践をパネルで紹介したり，手作りの紙芝居や人形劇を披露したりしてこの文化祭を盛り上げている．このような民族教育に熱心な教師が徐々に増えている．保護者たちは，子どもたちの発表に声援を送りながら，民族料理を用意して参加者に振る舞い，キムチなどの物品販売でオリニ会の活動資金の調達を行っている．

その意味で，この「ウリフェスタ・ナラ」は多文化共生社会そのものである．われわれの課題は，この小さな時空間をどのようにして日本社会に拡大するかであろう．

４．１．３．地域単位のオリニ会活動

「橿原オリニ会」と「生駒オリニ会」は，保護者の会費と各市の補助金で運営されている．教育行政の支援を受けながら小学生を中心に朝鮮をルーツにもつ子どもたちが集まり，お互いに民族名を呼び合い，つながりを深めている．

生駒市教育委員が発行している「生駒市外国人住民教育の手引き（資料集）」では，「生駒オリニ会」について次のように紹介されている．

> 現在，生駒市には，在日韓国・朝鮮人の子どもたちが集う「生駒オリニ会」があります．毎月第２と第４土曜日の午前中に，生駒市内の小学校で自分たちの国の文化や言葉を民族講師の先生とともに学習しています．幼稚園から中学生まで，２０名近い子どもたちが楽しくチャングを演奏したり，ハングルを勉強したりしています．この教室では，お互いに本名で呼び合い，同じ在日韓国・朝鮮人としてのつながりを深めていくことができます．奈良県では，大阪府のような民族学級がありません．奈良県内でもこれだけ多くの在日韓国・朝鮮人の子どもたちが集まる場があるところは少なく，身近にそんな集いの場があることはすばらしいことです．長い間、外国人住民が自らの国の文化や歴史について学ぶことが，学校教育の中で保障されてきませんでした．外国人住民がその民族性を自由に表現できる環境としてのオリニ会の果たす役割は，生駒市の教育においても大きな位置をしめることになるでしょう．

この手引き書は，保・幼・小・中の教師７名と在日外国人３名，教育委員会２名のメンバーで構成された「生駒市外国人住民教育推進懇話会専門部会」委員が作成したものである．２００２年に第１集「資料編」が，翌年第２集「実践事例集」が市内の全教職員に配布され，日々の教育実践で活用されている．当事者が加わって市と市教委が協力して外国人住民教育の手引書を発行することの意義は非常に大きい．

このような教育環境で，生駒市の外国人児童・生徒の本名使用率は 54.1%（2002 年）に達している．これは，全国的に見ても比類のない高率である．ちなみに，奈良県の場合，「県外教」の２００２年度調査[11]では，本名（民族名）使用率は，保幼小で１２．６％，高校で１９．０％である．「学校が休みの土曜日はオリニ会で勉強や」と，友達にも自然に話すことができる在日コリアンの子どもの存在は，日本人の子どもたちの異文化理解を深める国際理解教育にもつながっている．

4．2．地方自治体，教育行政，学校（教師）への働きかけと連携

「保護者の会」は単なる親睦団体ではない．外国人教育の推進について，地方自治体への働きかけを行い，教育研究団体と連携しながら，その重要性を訴えてきた．

4．2．1．地方自治体への働きかけ

3．2．1の項で，「本名問題」に対する行政の責任と役割について述べた．ここでは，保護者たちがどのようなプロセスを経て，行政と連携を深め，教育施策に参画していったか，筆者のケースを例に述べてみたい．

筆者が学校教育に疑問を持ったのは，子どもの就学案内時である．通名の案内が届き，一瞬不安に襲われ，生駒市教委に次のように電話をした．

「子どもは幼稚園に本名で通っているのに通名の案内がきました．通名でないと学校に行けないのですか」

「通名がある場合は通名で送っています」

「通名で行けと言うことですか」

「いえ，本名でも結構です」

「本名でも」の「でも」にこだわりを覚えたが，「保護者の会」結成以前であり，誰にも相談できぬままその感情を胸に納めた．

4年後，「保護者の会」が結成され，筆者も参加するようになり，「誰が在日かわからない」という教師の言葉に，通名の就学案内が送付されたときの当惑感が蘇ってきた．そして，今回は，保護者会の仲間や教師と市教委に赴き，通名問題について糺した．当時の学校教育担当者は「通名のある人には，通名の案内を送っている．隠したい保護者の思いがあるから本名を学校に伝えていない」と平然と答えた．「保護者の願い」という当局の意外な理由にとまどったが，どうしても納得できなかった．就学時に隠したいと思っても，16歳になると外国人登録の手続きを行わねばならず，隠しきれるものではない．ましてや社会では通用しないのであるから。

本名抹消の原因は，市教委が当初主張していた「本名を隠したい保護者の願い」でなく，コンピューター処理上の問題（入力できる字数制限）であり，市民課の段階で通名だけが残り本名が抹消されていたことが後日判明した．これでは，朝鮮人を日本人として扱った戦前の植民地時代と同じ人権意識と言われても仕方がない．日本名を使用する人たちは日本人として扱って欲しいと願っているかのような日本人優位の「善意」の思い込みが，問題をより複雑にしていたのである．

「子どものためにどうすればいいのか」，この一点で市教委と向き合って，何度も話しあって相互に理解を深めていった．市長選挙時には，外国人住民施策についての公開質問状を全候補者に届け，市独自の「教育方針」策定の公約を引き出して，ついに実現できたのである．

生駒市で，「保護者の会」メンバーが参加してできた施策，委員会等は以下の通りである．

・ 生駒市国際化基本指針　１９９６年３月
・ 生駒市外国人住民教育指針　２０００年３月
・ 『人権教育のための国連１０年』生駒市行動計画　２００１年８月
・ 生駒市外国人住民教育推進懇話会　２０００年４月～
・ 生駒市人権施策審議会　２００２年　４月～

生駒市以外，県下，各地の自治体で当事者である外国籍住民を加えた政策立案が行われるようになったが，その多くに「保護者の会」のメンバーが参画している．その事実に「保護者の会」の重要性が示されていよう．

４．２．２．教育研究団体との連携

奈良県人権教育推進協議会や各市人権教育研究会等の教育団体と連携を持ち，われわれは，教育現場に保護者や子どもたちの声を届け，教育内容を豊かにする努力を重ねてきた．２００２年度奈良県人権教育推進協議会研究大会では「多文化共生する地域社会をめざして～外国人保護者会活動から見えてきたこと」と題する報告を行い，オリニ会活動と学校教育をつなげる必要性を訴えた．また，各市の外国人教育に関する「手引き書」「資料集」に，保護者の思いや意見を反映させる教材づくりに協力してきた．

さらに，われわれは，多彩なゲストを招いて県単位での教育フォーラムを年に１回，開催してきた．

１９９７年「オリニたちに生きる力となる教育を！」
１９９８年「民族教育権って何？」
１９９９年「体験しよう！オリニ会（民族学級）」
２０００年「総合学習って何だろう？」
２００１年「保護者ができること？」
２００２年「民族教育の確立・豊かな多文化共生社会をめざして」
２００３年「朝鮮半島と在日コリアン、築いていこう多民族多文化共生社会」
２００５年「在日」の家族写真」
２００６年　「民族的アイデンティティを育む教育を求めて」
２００７年「地域で育てる多文化教育」

これらのフォーラムは，奈良県教育委員会，奈良市，生駒市，橿原市などの各地方自治体の教育委員会から物心両面の後援，支援を受けて実施されている．

その他，関西で開催された異文化間教育学会や国際理解教育学会にも，青年たちが民族舞踏を披瀝して，「内なる国際化」の視点からわれわれの課題を提起したり，シンポジウムのシンポジストとして民族教育のあり方について報告を行い，現実から遊離しがちな学術研究にもいささかの貢献を行ってきた．

１９９４年　異文化教育学会研究大会の懇親会での民族舞踏の実演　龍谷大学

２０００年　日本国際理解教育学会研究大会の懇親会での民族舞踏の実演と問題提起　奈良教育大学

２００４年　異文化教育学会研究集会でのシンポジウムでの問題提起とサムルノリの発表　佛教大学

２００７年　社会教育学会　全国集会「いこま国際交流協会設立にいたる経過と今日的な意義」の報告

４．３．地域活動と地域への貢献

保護者会は，地域における交流事業にも積極的に関わり，地域に定住外国人住民がいることを訴え，以下のような取り組みを継続してきた．

４．３．１．国際理解、交流事業への参画

地方自治体が主催する国際交流事業やイベントにも積極的に参画してきた．例えば，生駒市子ども国際交流の集い「わいわいワールド」（２００１年～），「ひゅうまんフェスタ橿原」（１９９７年～）などである．民族楽器の紹介と演奏，韓国料理の講習会，キムチづくり講習会など韓国文化の紹介を通して，多文化共生の意義を目に見える形で示してきた．日本生まれの三世・四世であるため，紹介する文化内容については本国のものと異なっているが，文化的変容の事実としてありのままのものを提示することに務めている．国際交流事業に準備段階から関わり，共に参画することで行政や地域住民との交流の輪を広げてきた．

４．３．２．国際理解、人権教育の「出前授業」

「総合的な学習の時間」の開始以前から，地域の幼稚園，小学校，中学校の要請に応えて国際理解教育や人権教育の授業へ，ゲストティーチャー・協同実践者として参画してきた．開発した教材やテーマは，「韓国・朝鮮のお正月」，「三年峠の劇をしよう」，「韓国の遊び」，「朝鮮の楽器」などで，実演を交えて披露している．また，「外国人教育」ビンゴゲーム，「ちがいのちがい」カードゲームなどの参加型学習の紹介も行ってきた．さらに，紙芝居，民族衣装，民族楽器，民芸品，遊び道具など，我々が収集した教材の貸し出しを行い，地域の国際理解教育に寄与している．

その他，人権講座や教員研修会の講師として，「共に生きていくために～在日朝鮮人保護者の思い」，「保護者として学校に望むこと」などのテーマで当事者の声を届けて，教師たちと連携を深めている．

以下に紹介するのは，筆者が２００５年１月に奈良教育大学で行った講演に寄せられた学生たちのコメントの一部である．

・ 李さんの話を聞いて，一番印象に残ったことは，子どもたちに民族の文化を伝える活動をしていることです．生駒オリニ会などで育った子どもが，今度はリーダーになり，ま

たそれを目標にする子どもが生まれと，非常に良いつながりだと思いました．李さんご自身の過去の体験から自分の子どもたちの世代にはそういった体験をしないでいい社会になって欲しいという思いが伝わり，私たち教師になる人間は，こういった問題に目を向け，多くのことに触れていこうと思いました．（１回生）

・ 今日の講義では，在日韓国人である李さんのお話を聞くことができた．その話の中で一番強く感じたことが在日韓国人の自己実現である．昨年の韓流ブームと共に身近になった韓国であるが，日本における在日韓国人の状況は厳しい．国家公務員の官僚試験が受けられなかったり，年金，選挙権がない．しかし，そういった現状に屈することなく本名を使い，様々な韓国文化の交流活動を行っている李さんは素晴らしいなと思った．そういった活動は必ず子どもたちに伝わり，そして日本の社会にも広く浸透していくと思う（１回生）

筆者の訴えが，彼らの胸に「何か」を刻印したのではないかと手応えを感じることができた．われわれは，少しでも在日コリアンへの理解を深めて欲しいという思いで講演活動を続けている．しかし，「出会い」で終わっていないか危惧している．一つ一つの「出会い」を単なる「出会い」で終わらすのではなく，さらなる発展を求めている．われわれの訴えを発展させる教師がいて，初めて保護者の貢献が活かされるのである．

４．４．出版活動

われわれは、「保護者の会」の活動を記録し、国際理解教育、人権教育の教材作成などの出版活動を行ってきた。出版活動などとは無縁な「素人集団」であったが，ワープロも基礎から学びながら、集会の記録をメンバーで分担してキーボードに打ち込んできた。また、感銘を受けた講演を、一人でも多くの読者に届けたいという思いでテープ起こしを行った。われわれを衝き動かす「何か」がメンバーに共有されていたからである。刊行されたもののいくつかは、教育現場で教材として使用されている。以下に示すのは、主要な刊行物とビデオ作品である。

①会報「モイム」の発行（年４回）縮刷版発行（全７集）

②５周年記念フォーラム報告集『生きる力となる教育を求めて』１９９８年、1000部発行

③１０周年セミナー報告集『輝く瞳』２００２年、2000部発行

④活動紹介ビデオ、スライドの作成

「保護者の会１年の歩み」「保護者の会５年の歩み」「保護者の会１０年の歩み」「生駒オリニ会のオリニたち」

テープ起こしやビデオ編集などの煩瑣な記録活動を継続することができたのは、メンバー同士の励まし合いと、日本人教師との連帯感があったからである。

５．おわりに

２００７年７月、我々は、「保護者の会」の１５周年フォーラムを開催した。そこで、新しい課題が提起された。すなわち、多文化化、他民族化する地域社会にあって、ニューカマーを視野に入れたあらたな組織の設立と活動の開始である。その先駆けとしての組織が、「いこま国際交流協会」(ikoryu) である。社会的にオーソライズされたＮＰＯ法人の資格をとり、定期的なニューズレターを刊行するに至っている。文字どうりオールドカマーが地域のニューカマーを地域社会に繋げる接着剤としての活動を開始したのである。

この活動は国際都市である大阪市のベッドタウンとして人口が急増している生駒市に限定されているが、地域に居住するニューカマーの子ども保護者を巻き込んで、地域の多文化共生の活動を展開している。その典型的な取り組みが「いこま国際音楽祭」であり、０８年３月には生駒市のみならず奈良市、橿原市など、奈良県下から、「中国帰国者の会」のメンバーをはじめとする、文化的背景の異なる約４００名の人々が、自分たちの音楽や舞踏などの民族文化を披瀝しあう場として交流し、相互理解を深めている。

以上、１５年間にわたる「保護者の会」の歩みと活動内容について詳細な報告を行ってきた。最後に「保護者の会」の活動が民族的アイデンティティの育成にどのような意義があったか考察し、残された課題について明らかにしたい。

第一の意義は、保護者自身の民族性の回復とエンパワーメントである。

在日コリアン保護者をはじめ、外国人保護者は一般的に孤立しがちである。支え合い、励まし合える同胞の仲間を必要とするのは子どもたちだけではない。「保護者の会」のメンバーは、差別の現実にぶつかっても、仲間同士で励まし合い、差別をエネルギーに転化し、活動を進めてきた。人権意識を高め、自身の民族的な自尊感情を形成することで、教育について提言する力をつけてきた。確実に言えることは、「保護者の会」のメンバーが子どもの教育問題に主体的に関ることで、保護者自身がエンパワーメントされたことである。その姿が、結果的に子どもの民族的アイデンティティの育成に反映されたのである。そして、成長する子どもの姿に保護者もまた励まされてきたのである。

「オリニキャンプ」に参加した日本人教師たちの多くから「子どもたちは本当にキャンプを楽しんでいる．しかし，最も楽しんでいるのは，あなたがた保護者たちですね」としばしば指摘される。けれども、それは実感であり、納得せざるを得ないのである。

第二の意義は、子どもを媒介として学校（教師）と家庭（保護者）がつながったことで、子どもたちのアイデンティティの安定が強化されたことである。

民族的アイデンティティは、家庭と学校、そして地域社会との関係性の中で育まれるものである。家庭の中だけの民族教育では不十分で、学校教育や社会教育との連携が求められる。なぜなら、アイデンティティとは、自分が自分に対して行う自己規定（identify）であるが、それは周囲の承認があってはじめて安定するものだからである[12]。

われわれ保護者の世代は、自分をコリアンとして自己規定するものが何も無い状況に置

かれていた。日本の学校へ入学することは、結果的に民族の言語、文化、歴史から切り離されることを意味していた。しかも当時は，通名使用が当然であり、同胞の仲間たちからさえ分断されていたのである。

けれども「オリニキャンプ」に集う子どもたちは、ハングルの基礎を学び、青年たちの乱打するチャングの響きに合わせて民族性を内面化（＝自己規定）する。そして、日本人のクラスメートも参加する「民族文化祭」で、自分たちの民族性が承認されるのである。

「本名」指導に関しては、特に、学校（担任）と家庭（保護者）の連携は必須である。突然、担任から「本名を」と打診されても、信頼関係がなければ、保護者は戸惑うだけである。時には、放置して欲しいと拒否する保護者もいる。けれども、そこには「いい加減な形での指導ならば・・・」という複雑な思いが込められている。「保護者の会」のメンバーは、教師たちとの協働作業を通して、生身の保護者に出会わせ、在日コリアン理解を深めている。そのような連携作業を通しての信頼感が、子どもたちの教育に還元されるのである。

第三の意義は、同世代・異世代間の子ども同士の教育力を組織したことである。

かつての在日コリアンがそうであったように、ニューカマーをはじめとする外国人児童・生徒は、多様な意味で「分断状況」に置かれている(13)。まず、祖国の言語や文化からの分断である。また、地域的にも分断されている。家族も地域社会から分断され、子どもたちも学校単位で分断されている。しかも、通名使用であれば、民族性は「見えない」状況である。そのまま放置されれば、強烈な同化の磁場が働く日本の学校文化の中で、子どもたちの民族的アイデンティティは保障されないであろう。

一方、空間軸についても「分断」されている。子どもたちは、「何故、自分たちが、今、日本にいるのか」という歴史からも分断されている。また、「自分たちはどのように生きて行けばいいのか」、「あの人のようになろう」という未来やアイデンティティの対象とも分断されている。そのような「分断状況」に置かれた二世の保護者たちが、子どもたちを民族キャンプや民族文化祭、オリニ会の活動を通して「連結」させ、相互に支え合う時間と空間を創造したのである。

キャンプでは、本名で呼び合うのが「当たり前」である。したがって、幼少時から自然な形で本名に触れている。また、キャンプでは、同年齢の仲間との出会いだけでなく異年齢との出会いも存在している。小学生のオリニとっては、勇壮に民族舞踏を踊るユース（中高生）のメンバーは、「あのようなお兄ちゃんやお姉ちゃんになろう」という憧れの対象である。ユースのメンバーにとって、在日コリアンのリーダーたち(14)は、「あのようにハングルも話せて民族文化を体得した成人になろう」というアイデンティティの対象である。

そして、非常に喜ばしいことであるが、民族講師の青年たちにとって、われわれがロールモデルの対象になっている。「民族キャンプに子どもを連れてくる『保護者の会』のメンバーのような家庭を築きたい」と一。ロールモデルの循環が行われているのである。仲間との出会い、民族文化との出会い、ロールモデルとの出会いの中で、子どもたちの民族的なアイデンティティが育成されているのである。

最後に、今後の課題について述べて稿を綴じたい。

一つは、「保護者の会」に集うコリアンの保護者は全体からすれば、残念ながら少数であることである。過去の被差別体験のトラウマから脱却できなかったり、周囲への配慮があ

ったりして、依然として民族性を隠し続けている保護者も少なくない。それは、彼・彼女たちの問題というより、少しでも異なる存在に対して「同化か排除」を迫る日本の社会風潮との関係で捉えるべきものであろう。

今一つは、「保護者の会」が中国人やブラジル人などのニューカマーの保護者とどう連携するかという課題である。いうまでもなく、民族教育はコリアンだけの問題ではない。居住歴の長い在日コリアンの民族教育権の確立が実現できなければ、新しく定住する外国人の民族教育も保障されないであろう。最近の「定住外国人統計」では、在日韓国・朝鮮人が５９８，２１９人に対して中国人は５６０，７４１人、ブラジル人も３１２，９７９人となっており、全体比率ではコリアンは約２９％を占めるにすぎない(15)。現在、ニューカマーの子どもたちの民族的なアイデンティティの育成が焦眉の急をつげている。そのようなニューカマーの子どもたちの教育とも連携させる課題が残されている。その一端を「いこま国際交流協会」の設立にしました。今後、全県下での展開が望まれる所以である。

「保護者の会」は、民族教育を教師任せにするのではなく、自分たちの課題として受け止め、可能な範囲で活動を展開してきた。当事者の組織化としての活動内容が、一つのモデルケースとなれば、在日コリアンだけでなく、マイノリティーの子どもたちの民族的アイデンティティを育む教育はさらに進展するであろう。

注

(1)　中島智子『１９７０年代以降の在日韓国・朝鮮人教育研究と実践の体系的研究』科学研究費報告，課題番号 13610328，2004，pp.209-238，
本文で紹介した発表内容は全国在日外国人教育研究協議会が毎年出版している『これからの在日外国人教育』に掲載されている

(2)財団法人入管協会『平成１９年版在留外国人統計』，2007

(3)朝日新聞・奈良新聞，1992／９／14

(4)奈良・在日外国人保護者の会小冊子「ウリ・マダン（私たちの広場）」，1993，自家製版

(5)京都大学教育学部比較教育学研究室『在日韓国・朝鮮人の民族教育意識－日本の学校に子どもを通わせている父母の調査』，明石書店，1990，p20，
そこでは以下のような数値になっている．
子どもに通名を名のらせる理由－韓国・朝鮮人であることを知られたくないため 1.3%，からかわれたり，いじめられたりしないため 5.7%，あえて名のる必要を感じないため 61.9%，親の仕事，地域での生活に差しさわりがあるため 6.4%，その他 13.8%．

(6)奈良・在日外国人保護者の会ビデオ「保護者の会１年の歩み」，1993，自家製版

(7)奈良・在日外国人保護者の会『生きる力となる教育を求めて』1998，自家製版，p.26

(8)前掲書 pp.5-6

(9)在日本大韓民国民団中央本部ＨＰ人口推移 http://mindan.org/toukei.php

(10)奈良県同和教育研究会『くらしをみつめる子らー小学校・中学校児童・生徒人権作文集』第３９集,1997

(11)奈良在日外国人教育研究会,2002年調査結果

(12)田渕五十生「民族的アイデンティティを育む教育とはー子どもたちの作文が示唆するものー」『高円史学』(奈良教育大学歴史学教室), 第２０号, 2004

(13)佐藤郡衛『国際化と教育』, 放送大学振興会, 2003, p.205

(14)「大阪府民族講師会」と「在日コリアン青年連合（ＫＥＹ)」の在日３世・４世の青年がリーダーを務めている．県内に民族講師が配置されていないためである．

(15)財団法人入管協会『平成１９年版在留外国人統計』, 2007

参考文献

金東勲　『共生時代の在日コリアンー国際人権３０年の道程ー』2004, 東信堂

高賛侑　『国際化時代の民族教育ー子どもたちは虹の橋をかけるー』1996, 東方出版

中島智子『多文化教育と在日朝鮮人教育』1995, 全国在日朝鮮人教育研究協議会

民族教育ネットワーク編『民族教育と共生社会ー阪神教育闘争５０周年集会の記録』1999, 東方出版

姜尚中　『在日』2004, 講談社

第２章「保護者の会」15 周年記念多文化共生教育フォーラムの記録

―地域で育てる多文化教育―

時： 2007 年７月８日（日）13：00～16：00
所： 奈良市　帝塚山学園 3 号館4F視聴覚室

コーディネーター　：田渕五十生　奈良教育大学
パネラー　：土谷尚敬 奈良県教育委員会事務局人権教育課
：大久保佳代　奈良県外国人教育研究会
：金生遵　生駒オリニ会・橿原オリニ会民族講師
：鄭順子さん 奈良･在日外国人保護者の会

（司会） 奈良教育大学教授の田渕五十生先生は、人権教育・多文化共生教育の第一人者として、研究と実践活動に尽力されており、私たち保護者の会にとって本当に心強い良き理解者パートナーです。では、田渕先生どうぞよろしくお願いします。

（田渕） ヨロブン、アンニョンハシムニカ。これからパネルディスカッションをいたしますが、今子ども達のまた若者達の歌と演奏を聴いて保護者の会の人たちの想いは一層ではないのかと推察します。今は若者が演奏していましたが、実は保護者も一緒にチャンゴをたたいていたんですよね。１５年前はオモニ達もチャングをたたいていたんですね。まだまだ、あの頃外国人であるということや、コリアンであることに対して息をひそめて耐えていましたね。そして、「このまま放置すれば子どもたちの民族性はどうなるのか」、という不安から、保護者たちが集まって声をあげた訳ですよね。そして、保護者自身が自分たちの民族性を取り戻し、それから、ただ単にチャンゴをたたくだけではなくて、これは自分たちの民族性を取り戻す、民族的なアイデンティティを内面化させたいという思いで、子どもたちと一緒に民族音楽を学んできて、今は自立して子ども達があのように成長しているのですよね。僕自身もこの会に１５年間関わらせていただいて、今日改めて感慨を深くすることができました。

実は今日のパネルディスカッションですけれども、過ぎ去った過去を振り返る「来し方」と、これからどのような課題があり、どういう未来を展望する「行く末」、すなわち保護者の会の新しい役割・課題が明確になればと思っています。

それでは、これから発表順に一人ひとり１分間ぐらいで自己紹介と私はこれをお話するつもりだ、ということを述べていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（土谷） それでは着席順で最初に失礼します。奈良県教育委員会の事務局におります土谷尚敬と申します。保護者の会が設立されて１５年ということで、「奈良県の教育行政としてどんな内容や方向を持っているのかを紹介していただければ」ということで本日お招

きをいただきました。私としましては、それぞれの教員が子どもたちにどんな形で接するべきか、また、在日外国人教育の方向性を示す物を奈良県としては持っています。奈良県教育の中では「在日外国人（主として韓国・朝鮮人）児童生徒に関する指導指針」というものを持っていまして、これにのっとって外国籍の子どもたちへの教育あるいは、外国人理解を進めるための教育を、この指導指針にのっとって進めていることを、まず紹介したいと思っています。

一昨年までは、教育委員会内の学校教育課でお世話させていただいてきました。しかし、現在はその中身が教育研究所に移ってしまった関係で、昨年から外国人教育に関わりまして、私ども人権教育課の方でお世話させていただいています。過去の５周年や１０周年にこちらへおじゃまをいたしまして、ごあいさつさしあげましたのは、教育委員会学校教育課であったと思いますが、そんなことから私がおじゃまいたしました。どうぞよろしくお願いします。

（大久保） 奈良県外国人教育研究会の事務局をしております大久保と申します。今日は本当に１　５周年おめでとうございます。たくさんの写真を見せていただいたり、すばらしいサムルノリを聞かせていただいたりしながら、１５　年前のことを思い出しました。今はユースとして活躍している青年たちが小学校だった時代のオリニ会のことを思い出したり、ともに歩む会発足の当初に一緒に活動しました先生方の懐かしい顔も今日はお見受けしたりしながら、１　５　年の歩みというものをとても感慨深く見させていただきました。

今日は、もちろん奈良県外国人研究会として来させていただいておりますが、一人の小学校教員としてこの在日外国人保護者の会とずっと関わってきた中で、１５年という意味を自分なりに整理したいなと思っておりましたので、今日はこんなお話もお引き受けをしました。前半は何をこの保護者の会の活動から私たち教員が学ぶことができたかというお話をさせていただきたいと思います。

それからもう一点は今県外教の方でも、奈良県全体の外国にルーツを持つ子どもたちの現状を把握しております。そんな現状をふまえて、これから求められる多文化共生教育のあり方ということで、課題提起をさせていただけたらと思っております。よろしくお願いいたします。

（金） アンニョンハセヨ。少し他人行儀といいますか、よそよそしくなりますけれども、「保護者の会」のオモニ、アボジ、ヨロブン(みなさん)本当におめでとうございます。なぜこのような他人行儀な挨拶をさせていただいたかといいますと、私がオリニ会や保護者会のみなさんとおつき合いすることになって、もう４年目になるんですね。初めてお会いした時、私は大阪府民族講師会という団体に所属しておりまして、大阪府下の公立学校で民族教育に取り組んでいたんですが、本当に強烈な、パワフルな保護者にお会いして、三ヶ月もつかなと思っていました。大阪府民族講師会からも、勇気あるなあ、頑張ってなあ、そんな挨拶をいただきまして、でも、実際おつき合いさせていただくと本当にすばらしいオモニ、アボジしかもオリニたちでしてね、３年、４年という日々があっという間に過ぎてしまいました。

私は今、豊中市人権教育企画課に籍をおきまして、市内６０　の小・中学校でニューカ

マーの子どもたちの通訳派遣の業務を担当しております。豊中市というところは空港もあり、阪大の国際寮とか大企業もいくつかありまして、非常にニューカマーで来られる人たちが多いんです。そこで、ニューカマーの子どもたちの相談や通訳派遣をしているのですが、今日は私たち在日コリアン、オールドカマーと言われる人たちとニューカマーと言われる人たちの対比と言いますか、そこから見えてくる今後の課題などを少しお話させていただけたらと思っております。どうぞ、よろしくお願いします。

(鄭) アンニョンハシムニカ。今日はたくさんの方に来ていただきましてありがとうございます。鄭順子（ チョン スンヂャ） です。「橿原オリニ会」の代表をしていましたが、一昨年、若い現役の保護者の方にバトンタッチでき、今は「保護者の会」橿原の代表をしています。「保護者の会」で、すばらしいオモニ、アボジとたくさんと出会い、共に歩んだ１５ 年でした。今日は保護者の皆さんを代表してこの場に立たせていただいております。

私たち保護者の育ってきた環境はそれぞれ違いますが、この15 年間、自分の子どもをどのように育てるのか、親の思い、願い、不安、いろんなことを話し合ってきました。私にとって、ホッとできる場所、なんでも話せる場所、一緒に問題を解決できる場所でした。

「在日コリアンの子ども達の教育をどのように進めるのか」という課題は、一部の先生方を除いて、ほったらかしにされていることに気づいた私たちは、保護者自身が主体的に学習と経験を積み重ねながら、教育委員会や学校に出かけていっては、話し合い、時には衝突しながら、連携できることを一つ一つ増やしていきました。一貫して教育環境の整備に努めてきた、この保護者たちのパワー、活力の源を前半でお話しできたらと思っております。後半は、これからの「保護者の会」が担えること、課題について考えてみたいと思います。

「保護者の会」結成当時のメンバーはコリアンの保護者ばかりでしたが、コリアン以外の外国人保護者も一緒に集える会にしたいと考え、「外国人保護者」という名称をつけ、国籍条項を持たないことにこだわってきました。15 年が経過した今、新渡日の保護者とどのように連携するのか、これからの課題の一つと考えています。

奈良の「保護者の会」が、他地域の保護者会と違うところは、夫婦、家族で来ているのが特徴かなと思います。それが大きなエネルギーになってこの１ ５ 年来たなあと、さきほどの青年たち、ユースメンバーのチャンゴ演奏を見て思いました。

(田渕) はい。というように教育行政がどのようにこの問題を捉えてきたのかという側面、そして教師たちがどのようにこれに関わっていったのかという側面、それから民族講師がどのような思いを持って応えていったかという側面、そして今どんな状況にあるのかという新しい状況について、そして、当初から関わってきた保護者が「在日コリアンの保護者」の会ではなくて「在日外国人の保護者の会」と、その先見性を確認すると同時に、ここまで新しい状況が来ていることを再確認したいと思います。

そこでこの「保護者の会」の果たす役割は何かについて論議を深めたいと思います。それではこれからの議論の方向ですが、まず、それぞれの方に最初１０分お話ししていただきます。そして、みなさん方の発表を聞いた上でもう一回お話をしていただきます。その前にフロアから質問があったら出していただいて、フロアの質問も受け、それをふまえな

がら後５分間で返していくというようにともに作っていきたいと思います。」

（土谷） それでは、トップバッターで失礼します。レジュメをつけておりますのでレジュメに沿って進めて参ります。まず１ と書きました「在日外国人（ 主として在日韓国・朝鮮人） 児童生徒に関する指導指針」という部分から述べさせていただきます。

この指針は、先程も申しましたように本県にはそれぞれ学校教育の中で大事にしたいという方向性を示したものがあります。たとえば昭和４１ 年奈良県の同和教育の方向性を示すものとして、県が定めました「同和教育の推進についての基本方針」というのがあります。この基本方針は、同和問題に関わる様々な中身、基本的な部分をきっちりと示す中で教育委員会としての、あるいは奈良県教育としての進む方向を示したものとして、私ども奈良県の教育の中での大きな柱として今日まで来ています。

今もこの基本方針に示しております中身、歴史的な流れ等で再考しなければならない中身はあるわけですが、その中心を貫いております基本的な考え方というものは、人権教育本筋として生きておる部分です。そんなこともあり、外国人教育に関わっても、「同和教育の推進についての基本方針」に基づいて教育は進められていく、その中で外国人教育も当然同じなんだというスタンスで進めてきたところです。

しかし、昭和５３年（１９７８年）あたりの中では、それでは不十分ではないか「『民族教育』が必要なんだ。その指導指針を作成する必要があるのではないか。」というようなことが、色々な場で出ていました。そして、歴史が進んでいくわけですけれども、１９８１年（昭和５６年）でしたが、在日外国人の公務員採用に関わって、県の見解を示してほしいというような要望が出されました。「同和問題以外の人権問題についての県民の意識は低い。」「在日韓国・朝鮮人に対する差別意識が厳しく現存している。」等の認識をベースに昭和６１年この指針を策定しました。

この指針は、前文と指導の留意事項ということで大きく２つに分かれています。前文にはこれまで奈良県教育が行ってきたことを示し、今後どうするべきなのかという、部分を細かく示しています。以降、この指針につきましては毎年担当の先生方、今日は保護者の会のみなさんの中でございますので、直接この指針を目にしていただく機会はなかろうかと思いますが、それぞれ教職員の方々にはこの指針を示し、外国人教育についてはこの指針にのっとって展開をして下さいということの講習会を開催しており、奈良県教育が何を求めているのかということを示しています。

たとえば具体的に奈良県教育をどう進めていくのか、平成１９年度の奈良県が進めていく指導方針、これは在日外国人ということではなくて、奈良県教育全般を示す方針でございますけれども、その中で国際理解を深めることを通して、互いに尊重しあう態度を育てるんだということを示しています。そのベースにありますのは、今話している指導指針です。色んな毎年毎年変化する状況を見すえながら、奈良県教育として、外国人教育をどう進めてるのかを示しています。

なお指針については、留意事項を５点ほどにまとめています。歴史的経緯を正しく認識させる、すなわち、在日外国人の児童生徒が我が国の学校に在学しているのはなぜなのかというようなことを正しく理解をさせる、そして、在日外国人に対する差別や偏見をなくすことにつとめる、そんなことが、まず１点目に掲げている中身です。

この中では、我が国と近隣諸国との親密な関係が、どう変化してきたのか、非常に密接な関係で長い間友好的にそれぞれがつながっていた、そんななかから、秀吉やそのあたりでの海外に勢いを伸ばそうとした中で進められた日本の政策とか明治以降の姿とか、あるいは、戦後の状況なんかもそんな中で改めて示しているところです。

２点目、在日外国人児童・生徒が差別や偏見に打ち勝ち、力強く生きるよう生き抜く力を養うよう指導に努めるということを示しました。その際には、必ず保護者の方とも連携をしながら、本人・保護者との共通理解を十分に図ることが必要なのだということ。

それから３点目には、全ての児童生徒にたがいの国の生活や文化などについて、正しく理解させ、共に学び、共に育つ集団の育成に努めるということを示しています。互いに尊重し合い、支え合う態度を身に付けさせたい、そんな指導に努めるということを示しています。

そして４点目は、在日外国人児童・生徒の学力の向上と進路指導の強化に努めることです。県としましても奈良県行政の中でできることをすすめております。それに加え、先生方の研究組織である県外教等のお力も借りながら、進めているところです。

最後、５点目は、在日外国人の児童・生徒に関する指導をいっそう深めるため、指導力の向上に努めることです。教員それぞれが、そんなことがあったら困るんですけれども、誤った認識やあるいは、時代の変化に対応しきれない知識で子どもに接することほど、罪深いことはなかろうと考えています。時代の変化にそれぞれ教職員がしっかりと目を見開き、その時の状況状況を正しく子どもたちに伝えることの必要さを示しています。具体的には教育委員会では、講習会という形で推進しているところです。

（田渕） 同和教育の中から、在日外国人の教育が注目されるようになって来たのだと報告がありました。けれども、１００年、また何世紀にもわたって社会的、経済的、文化的に低位におかれた差別部落のことを子どもたちの実態を無視して、「同じように扱う」ことがいかに差別的であるかということを暴露したのが、同和教育だったんだと思いますね。そういう面では人権教育の中で日本の人権教育は、同和教育から始まったというのは過言ではないですね。そこから「差別の実態に学ぶ」という同和教育の原則がうちたてられた経緯があります。

しかし、それは日本人だけであって、外国人の子どもたちの歴史的な経緯は、ほとんど顧みられなかった。まず日本の学校に入ること自体が、すでに文化から切り離し、言葉を奪っているという日本の学校教育の残虐性に教員自身が気付くことがなかったと思います。だから、その歴史的な経緯やコリアンの子どもたちの学力の向上、そして進路の保障、教育のアウトプットは進路保障ですね。そして、そのための教員研修を作っていくという具体的な指導の留意点が提示されたのだといういきさつがお話されたかと思います。それでは、教員としての立場から大久保先生お願いします。

（大久保） 私は学校の教員をして今年２６年目になります。１５周年なので、ほぼ自分の教員生活の三分の二を保護者と共に歩んできたかなあと自分でふりかえっておりました。今、土谷課長がお話いただきました指針の策定に関わる前からも教員をしておりましたので、指針が出来る前と出来た後、また、保護者の会の活動が始まる前とその後という視点

から、少し学校現場のことを振り返っていきたいと思います。

私が教員に成り立ての頃、「アプロ」のハングル表記を黒板に書きました。そして、子どもたちに『韓国、朝鮮の言葉なんやで。』って紹介しました。その日の晩に子どもがおうちで話をしたんでしょうね。保護者の方が私のところではなくて、学年主任の所に「大久保先生の学級では日本の学校なのにハングル文字を書いて偏向教育をしている」という電話が入りました。学年主任は校長に伝え、翌日、校長先生に呼ばれたところで、私は『校長先生は英語を教室の中では書かないんですか。』ということで反論したのをとてもよく覚えています。

その後も「生駒トンネルと朝鮮人労働者」の課題で地域の教材を社会科で取り組んでテレビのニュースになった後に、何十本という電話が学校の方に入りまして、そのほとんどは抗議の電話で、偏向教育をしているというような電話の内容でした。それぐらい、この指針が出される前の奈良県の学校現場の状況というのは、在日外国人教育、在日朝鮮人教育は、タブー視されたり、偏向教育だと呼ばれた時代があったということも私たちは確認をしていかなければならないと思います。

そうした中で、県の指針が出されました。そして、その具現化のために奈良県外国人教育研究会が発足しました。もともと解放教育の土壌があった奈良県の中で、しっかりとした指針が出され、研究会ができたことで、まるで水を得たように、今まで点の実践であったのが、いっきに線であったり、面であったりというふうに、各小学校・中学校に実践が広がってきたんだと思っております。

たとえば、ちょっとしたことですけれども、チマチョゴリを着てみたいと言われる学校が増えたり、保護者の方に来ていただいてゲストティーチャーになってもらって在日の思いを知りたいという学校が増えてきたり、そんな実践が今当たり前に、各小学校・中学校で行われるようになったそのきっかけが、この指針であると思います。

２点目ですが、県外教ができてその当時各地で在日外国人教育の準備会というのができました。生駒市にもその準備会ができて、私もその準備会に入らせてもらって、地域に住んでおられる在日の保護者と出会っていこうということで、１８年前、李和子さんのおうちを部会のメンバーで訪ねました。その時代に初めて私たちは在日の保護者と出会って、自分たちがどんな暮らしをしてきたのか、自分たちがどんな思いを持って子どもたちを学校にやらせているのかという話を伺うことができました。その時、和子さんが「私たち一人一人が点在しているのではなくて、私たちが集まれる場所を先生たちがつくって欲しいんです。」という話をしておられたことがとても心に残っております。

その後、県外教も関わっていきながら、奈良・在日外国人保護者の会が結成され、その中でより多くのオモニやアボジの思いと、私たち教員が出会っていくということができたかと思います。

しかしながら、私がいちばん大きかったなあと思うのは、私たち教員が在日コリアンの子どもたちの在籍を把握することが在日外国人教育の第一歩であるという認識を、学校現場に確認することができたことだと思います。オリニキャンプが開催されて、「オリニ会がありますよ、できるだけたくさん在日朝鮮人の子どもたち・在日コリアンの子どもたちに来て欲しいので先生方案内をして下さい。」ということになります。

当時私たち小中学校の現場にいたものが、在日コリアンの子どもたちの姿そのものが見

えていない、ということが明らかになりました。各地の教育委員会で通名を持つ在日コリアンの子どもたちはコンピューター処理の関係で、通名があれば本名が消されていって、指導要録にも本名が書かれていないという現状が、保護者の会の中からも、そして、私たち教員現場からも明らかになりました。長くかかりましたが、各地の教育委員会と話し合いを重ね本名記載が実現をし、やっと、私たち学校教員一人ひとりが、子どもたちの違いを把握するとういうところから、在日外国人教育がスタートするんだということをこの「保護者の会」の取り組みから学ぶことができたのだと思います。

当初、オリニ会の案内を学校に配ったときに本当に子どもたちに配っていいのかなあ、という不安が、先生方にあったのも事実です。その案内をまくことが、プライバシー侵害になるんではないだろうか。日本人の子どもも朝鮮人の子どもたちも同じ様に教育すればいいんじゃないだろうか。そんな声があったのも事実です。

しかしながら、先ほど土谷課長がお話になられた指針の文言の中にありますように、「社会に存在する差別意識の払拭とあいまって、すべての児童生徒が互いに理解を深め、人権を尊重し合うとともに、在日外国人児童生徒が安定した学校生活をおくることができる」ようにするためには、私たち自身が子どもたちの違いを理解しないと、この在日外国人教育というのは進んでいかないんだということを、学ぶことができたんだと思います。

資料に、県外教が長らく取り組んできました外国にルーツを持つ子どもたちの在籍実態調査というのがあります。これは、各学校にお配りをさせていただいて、自分の学校に何人の外国にルーツを持つ子どもたちがいるかということを県内すべての保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校に協力いただいています。

これは保幼小中ブロックで１０年、高校ブロックではもっと昔からやっておられるんですけれども、１０年間やってる中でなかなかご協力いただけない所属がありましたが、やっと昨年小中高に関しては１００％ の提出率ということでご提出をいただきました。この資料だけで見ると、グラフと数字だけで、とても無味乾燥な数に見えますが、実はここで把握をしていただいている一人ひとりの子どもたちが、どう生きていくのかということについて考えていく教育が、在日外国人教育なんだという提起をいただいたのだと思います。

３点目ですが、私の学級の子どもをオリニ会に連れて行った時の話をしたいと思います。コリアンの子どもでその子は通名でした。家庭訪問に行ったとき、お母さんから私が本名の読み方をお聞きしている場で、「自分の本名はそうやったん」とはじめてびっくりして聞いた子です。学校の教室というところではできない在日の子どもたちの出会いの場を、そして自分自身の民族との出会いをということで、オリニ会に連れて行きたいなあと思って、『行きませんか』と声をかけたところ、『行きますよ』と言ってくれたので、初めてオリニ会に参加しました。オリニ会で韓国語でソンセンニムに自分の名前を呼んでもらって、返事は『イェー』とするんやでと教えてもらって、『イェー』と元気よく返事をしていたのをあの子の笑顔は今でも忘れられません。

そのことがきっかけになって、その子は、本名を名乗っていくことになります。奈良県人権教育研究会が発刊しております『なかま』の中学年用『なかま』の中に『本当の名前を呼んでもらって』という教材がありますが、それは、このオリニ会と出会ったある子が、自分の本名を取り戻したことを作文にしてくれたものがもとになっています。

在籍調査に戻るんですけれども、６ ページのところの在日コリアンの乳幼児児童生徒の在籍調査のところをご覧下さい。行政が調査をされるとどうしても、外国籍の子どもたちの数しかわかりませんが、学校にこういうふうに調査をさせていただくと、日本籍のコリアンの子どもたちの姿も明らかになってきます。これは、なぜかというと学校でなんらかの取り組みをされたときに『先生、うちのおうちにもチマチョゴリがあるよ。』と話をしてくれたり、家庭訪問で保護者と連携をしながら子どもたちの現状がわかっていくという、そういう把握もできているからです。

その中で、実は本名使用率の表なんですが、これは日本籍コリアンの子どもたちも含めた調査の中の本名の使用率ですので、母語読みの民族名や日本語読みの民族名それからダブルネームも含めてこれを民族名というふうに考えていきますと、日本籍の子どもたちも含めて本名使用率は１７％になります。韓国・朝鮮籍の子どもたちだけで考えていきますと、実は３５％の子どもたちが、民族名を名乗っているというふうになります。これは、とても高い民族名使用率だと思っています。それが、奈良県の各学校の取り組みにももちろんつながっていると思いますが、その中で、実はオリニ会という出会いの場の中で、民族名を取り戻した子どもたちがたいへんたくさんいるのではないかな。それが、このような数字に表れているのではないかと考えております。

（田渕） ありがとうございました。子どもたちが今日、自然な形で民族衣装を着て、そして、民族の文化に触れる「豊かな出会い」、これがある面では本名使用率の高さにつながっているのではないか、ということも今指摘されました。ありがとうございました。

フォークダンスは踊っても、これは問題ない。しかし、朝鮮の踊りをすると、「偏向だ」というのが、実は２０年前の状況だったのです。２１年前ですかね、県外教が結成された。僕もあのときの熱気を覚えており、記念講演をさせていただいたのですけれども、本当にこれから新しい教育が始まるという感じでした。しかし、あの熱気はどこにいったのでしょうか。ちょっと聞いてみたくなるような感じがしないでもありません。

その中で大久保先生が、地道に実践されてきました。僕の大学の学生に、『どうしてあなたは学校の先生になりたいと思ったのですか？ 』と質問したとき、『はい。大久保先生に出会ったからです』という答えが返ってきました。こんな厳しい中でいい先生に出会うということが子どもたちのアイデンティティの対象になっているのですよね。それでは、次に金ソンセンニムにお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

（金） 私は、普段大阪にいますので、少し大阪の話が多くなると思いますが、この点ご了承ください。まず奈良には、橿原オリニ会と生駒のオリニ会という活動があります。大阪には、いわゆる民族学級とよばれる公立の小中学校で取り組まれている民族教育があります。

今、大阪府下に約200 の民族学級があります。そこに民族学級で指導する在日コリアンの民族講師「ソンセンニム」がいらっしゃるんですが、私はそこで長いこと民族講師「ソンセンニム」をしていました。大阪の主に北摂地域でです。民族講師をしておりましたけれども、オリニ会に来てたいへんびっくりしたことがあるんです。それは何かというと、オリニ会に来るオリニ達、子どもたちがみんな生き生きしてるんですね。元気なんです。

すっごく元気です。保護者もすっごく元気です。ほんとに集えることを楽しみにして来ているという印象を受けました。

私が行っていた北摂の地域では、一週間に一回、いわゆる民族学級の取り組みが放課後にあるんですが、ある学校では、対象児童の女の子が「ソンセンニム、カーテン閉めて。」って言うわけです。「今日はチャンゴの練習やろ。チャンゴはあかん。ばれるやんか。」というんです。「廊下通った子に聞こえるやん。」「じゃ、音楽室でやろか？ 」となる。自分たちが在日コリアンであることを「ばれる」という。これは昔の話じゃないんです。つい最近の話なんです。そんな状況が多いんですね。だからすすんで来るというよりは、先生が手を引いてくるとか、あるいは民族講師のソンセンニムが子どもを探しまくって民族学級に繋げてくるとか、このようなことが少なからずあるんです。そういったなかで在日コリアンがすすんで保護者と一緒にオリニ会をするという奈良の取り組みに対して本当に新鮮なショックというか驚きを覚えました。

私は、民族講師の他にも、国際理解教育や総合学習などといわれている授業のゲストティーチャーとしてよく呼ばれます。奈良や橿原、生駒にも行きますが、多くの子どもさんは、民族衣装を着たり、「トルハルバン」など珍しい物を持って行くので大変喜んでくれ、クイズなどもするんです。自己紹介で、「金生遵です」というと、例えば「キムチや」とよく言われます。それは、かわいいですよ。「そうやで、キムさん、キムチ大好きやで。食べたことあるやろ。」というような返し方をするんです。そのほかに金正日とかね、悪気はないんだけども、子どもたちの反応の中に、韓国や朝鮮というと、ヨン様や金正日やキムチ、こういったものの認識・出会いしかないですね。

私たちは在日として、僕は３世ですから１世から数えるともう１００年、1 世紀にわたってここに住んでいる。先ほど参政権の話もございましたけれども、私たちは１世紀にわたってここに住んでいながら、『一体どういう存在なんだろう』と思うんですね。

レジメの６ページにある在日コリアンの本名使用率の資料ですが、実はたいへんびっくりしているんです。本名使用率が高いこともありますが、まず日本籍に関して調査をしているのは、ちょっと聞いたことがないですね。大阪府の調査資料も持っておりますけども、大阪府は国籍ホルダーとしての在日コリアンに対しては調査しております。本名使用率は13% という数字を教育委員会の先生から聞いておりますけども、帰化をした人、或いはダブルだったり、日本国籍を持っている子どもたちも考慮すると、ほとんど１桁の数字であると思います。

今、日本の公立の小中学校に通う子どもたちに在日コリアンという隣人がいるという認識が足らない。ほんとに出会いの場が希薄なんですね。韓国や朝鮮を紹介するとヨン様や金正日やキムチというふうな反応しか返ってこない。－ － この辺が私の今の活動の主な取り組みの原点なんですけども－ －国際理解教育とか外国のことをたくさん調べて勉強する前に、皆さんの隣には在日コリアンと言われているたくさんの人たちが一緒に暮らしていているんだよということを是非伝えたいなぁと思いながら、いろんな学校をぐるぐる回っています。

大阪府にある民族学級と、こちらのオリニ会の共通している部分が一つあります。それはとてもパワフルであり、生活力があるということなんです。言い換えると、行政としては積極的に支援もせぇへんけれども、積極的に反対もせぇへん、やれるならやって下さい。

その姿勢がずっと見え隠れしている。大変しんどい状況の中で、民族講師もボランティアで民族学級を立ち上げましたし、保護者の皆さんも手弁当でこの１５周年を迎え、本日があると思います。

（田渕） はい、ありがとうございました。それでは引き続いて、保護者の鄭順子さんにお願いします。

（鄭） 私の家族は、１５年前に家族全員で本名の生活を選びました。「保護者の会」と共に歩んだ１５年であったと改めて思います。今日は結成当初に来られていた先生方の懐かしい顔を見ながら、そして、パネラーの方たちのお話しを聞きながら、この１５年、「保護者の立場で」ということを常に原点において活動していたと思いました。

私自身は子どもの時からずっと通名で生活し、結婚してからもわが子を通名で学校に通わせていました。でも、自分が幼い頃にクエスチョンを持ってきたことが、自分の子どもにもクエスチョンとなっている。「保護者の会」に参加する中で、私自身が受けてきたマイナス的なものが、世代を超えてもまだあるという現実に気づきました。『わが子には自分をありのままに出して生きられる教育』を願うようになり、保護者会活動を続けてきました。

「保護者の会」が出発したときから、「民族教育」というこの４文字に凝縮されますが、とにかく、ありのままに自分の子どもを育てたいという思いで、子どもたちが通う学校、地域、教育委員会と関わってきました。子ども達の教育問題を学校任せにせず、保護者として主体的にかかわっていこうと決めた時、私たち自身が人権意識を高めなあかんと強く思いました。私たちが受けてきた差別、民族的な偏見に対して、「それは差別や」と見抜く力を、私たち自身がつけなればとならないと思いました。

まず、『親と子が民族に出会おう、仲間に出会おう』を合言葉に、保護者向けには、人権学習会や民族文化の講座、交流会などを開催し、『オリニサマーキャンプ』や地域の『オリニ会』そして民族文化祭『ウリフェスタ・ナラ』など、子ども達が集まり学習できる場所を作っていきました。同胞同士励ましあい、怒りをエネルギーに変えて自分たちの中に血と肉にしてきたと思っています。

今日の「１５ 年のあゆみ」の映像を見て、保護者自身の民族性の回復だったんだと思いました。それと同時に、自分の人権が回復されたら見えてくるんですね。あれ、これはおかしいというところが見えてくる。保護者の立場だけでなく、先生の立場からであったり、それから行政の立場からであったり、いろいろな角度から見えてきたのではないかと思いました。これまで関わって下さった先生方や民族講師のアドバイスを積み重ねてきた『保護者の会』だった、保護者自身がエンパワメントしてきた１５年だったと思います。

地域オリニ会を充実させようと、行政や地域社会に発信し続ける親の姿が、子どもたちの民族的アイデンティティの育成に反映され、また、成長する子ども達の姿に私たち保護者が励まされてきたのです。私自身においては、セピア色だった「民族」が、この１５年で本来持っている姿、色鮮やかな「民族」色となって私の中によみがってきた、そのための活動であったとつくづく思います。

それから、もう一つ私にとって大切なことは、「保護者の会」という、いつでも帰れる

場所、居心地の良い場所があったということです。日本社会に向かって、「在日」を語れば語るほど、いっぱいの荷物を持って帰るんですね。自分の思いをいっしょうけんめい伝えるんですが、どこか消化しきれないで持って帰るものがある、それが荷物なんですね。その荷物の置き場所が「保護者の会」だった。奈良に集うオモニ、アボジたちが、その荷物をほどいて、ひとつ、ひとつ、分析しながら、また私に返してくれる。共に励まし、整理できるところ、仲間がいる。一個人、一家族ではできなかったことです。そういう居心地のいい場所であったなあと思いました。

今日ユースのプンムルを見て、最初の頃を思い出しました。オリニキャンプで子どもたちを出会わせ、民族的アイデンティティを育む仲間作りを中心に活動していた保護者会でした。10 年前の5 周年記念フォーラムで一人のアボジから、『これから先、子どもが成長するにつれ、親の言うことなど聞かなくなる時期が来る。その時期に、民族的なテーマに向き合える環境がないのが親にとって一番つらい。保護者の会としてどのように解決していくのか？』と課題をもらいました。

あれから１０年の活動を経て、今日のパネラーの話しを聞きながら、今日ここに答えがあるんではないかと思っています。行政や外国人教育の取り組みをしている日本人教師のマジョリティ側と民族講師・保護者のマイノリティー側が、それぞれ責任分担で歩んできた結果が今日のオリニ、ユースの姿であると思います。

今日は私のオモニも来ているんですけれども、私自身このように自分の民族を前に出して生きるようになって、本当に苦労して日本の地で生きてきたオモニ、アボジ、そして、シアボジ、シオモニの民族性を心から尊敬できるのです。今日はちょっと涙を流してしまいましたけれども、これからは、ここに集まったオリニ・ユースたちが、どのように自分の民族性を豊かに育み発信していくのか、本当に期待しております。この様な思いで今日を私は迎えました。

（田渕） ありのままでいいのよ、というその周囲の日本人との関係性の中で民族的アイデンティティが安定していくんだということなどいろいろなメッセージがあったかと思います。

たとえば、これは外国人の子どもたちに共通していることですが、彼等は非常に分断されている状況に置かれています。まず地理的に言えば、祖国から分断されています。そして、生野であれば、コリアンの人たち、また外国人の人たちはコミュニティーを作っているのでまだつながりはあるけれども、奈良なんかはどちらかといえばバラバラになって、そして、地域からも分断されており、地域とのつながりがない状況です。子どもたちも分断されている。これは一人は弱いですものね。

それがこの保護者の会を作って集うことでもって、一人じゃないんだ、そこで文化に触れる、言葉に触れる、歴史的な経緯に触れる、そこでこの自分が仲間とつながるだけではなくて、どうしてアボジやオモニたちが日本にやってきたのか時間的なつながりが見えてきます。もしそのような歴史的認識がなければ、どうして自分がここにおるのか、親は勝手に来たのかもしれない。でも、自分自身がなぜここにおるのかということがつながらずに、このことをクエスチョンのままで二世は生きてきました。

でもそのことが、いわば時間軸がつながった時に、またこのオリニ会に集い、今日歌っ

た小さいオリニたちが、チャンゴをたたくお兄ちゃんたちに触れたときに、「あんなお兄ちゃんになっていこう」、「あんなお姉ちゃんになっていこう」という時間軸がつながった時に過去から未来へつながったときに教育というのはうまくいくんではないかという気がいたしました。

行政が「指針」を出していく中で、教師が取り組むことができるようになっていった。そして、そういう中でソンセンニムも大阪の方から来てバラバラだけれども、この親の熱意、この親が子どもにかける熱意というものが伝わった子どもたちの中で教育実践が非常にやりやすかったという報告がありました。そして、親たちも保護者たちもこの「保護者の会」に関わる中で自分自身もエンパワメントされたということが前半で話し合われていたと思います。

みなさま方に質問用紙またはコメント用紙を用意しております。後３０分ほどしか時間がないのですが、みなさんの意見も聞きながら、後半も話しを進めていきたいと思います。実は今後の展望、いろんな面で今後の展望も出されているかと思うんですけれども、これに書いていただいてもいいです。５分間だけ休憩をいたします。そして、書いて持って来ていただいて、それにお答えしていただくという形で進行したいと思います。５分間ほどさしあげますので、コメント用紙に書いていただいてみなさんと議論を深めたいと思います。それではちょっと休憩をさせていただきます。パネラーのみなさんありがとうございました。

休憩

（田渕） それでは、何人かのパネラーの方に答えていただきます。大久保先生に、『県内の外国にルーツをもつ子どもたちについてもう少し現状などを教えて下さい。資料をふまえて県内の外国にルーツをもつ子どもたちについてもう少し現状などを教えて下さい。』という質問があります。

（大久保） 調査の方を見ていただいたらといいと思うんですけれども、先ほどは在日コリアン乳幼児児童生徒の調査を見ていただいたんですが、７ページのところの「新渡日」乳幼児児童生徒在籍調査をご覧ください。ぱっと見られたら「新渡日」ということで、外国籍が３０％と思われてびっくりされるかもしれませんけど、これはお父さんお母さんが「新渡日」であるというダブルの子どもたちも含めた「在日コリアン以外の外国にルーツを持つ子どもたち」の調査ととらえていただいたらいいかなと思います。

見ていただいたらわかりますが、まず８ページの総人数から見ていきますと、「新渡日」の在籍数というのは、９７年から本当に倍増しています。国籍別で見ていきますと、中国の子どもたちがとても多いです。それから、その次にフィリピン、ブラジル、韓国、タイ、アメリカ、台湾、ペルーというふうに続きます。いわゆるブラジルやペルーといった日系人がとても多い滋賀県や三重県と比べると、奈良県では、それほどブラジルやペルーの子どもたちが多住をしている地域ではありませんが、国際結婚の子どもたちが半数以上となっています。９ページのところで、各市町村別に郡市人教から報告をいただいた在籍数も参考までにお読みいただけたらと思います。

そんな子どもたちが県外教の「なら国際こどもフォーラム」というところに集ってくれています。そこで話される保護者の思いというのが、この保護者会のオモニたちがかつて会の中で話しをしておられたことと、とても共通することがたくさんあるなぁと思います。

(田渕) その件について具体的にどのような活動をされていますか、という質問が大久保先生にあります。すなわち、在日外国人児童・生徒に関する指導指針をうけて実際現場においてどのような実践がなされているでしょうか。具体的に教えていただきたい。また、「指針」後、日本人児童・コリアン児童、それぞれにどのような変化があったのか教えていただきたい。これはむしろ今のような新しい状況をふまえて、どのような実践をされているかという質問もございますのでよろしくお願いします。

(大久保) 県外教に最近寄せられてくる各地のレポートの中では、このような外国にルーツをもつ子どもたちが自分たちのアイデンティティを学校や地域の中でも表出できるようにということで、日本に渡日されたばかりの保護者の方にゲストティーチャーになっていただいて、学校で自分の文化であったり、自分の思いを話してもらおうという取り組みをされているところが最近とても増えてきました。

先ほど金ソンセンニムが言われたように実際にはまだまだ国際理解教育で、遠い外国のことを勉強しようと留学生を呼ばれたりという取り組みが多いのも一方で事実ですけれども、その中で、隣の席に座っている外国にルーツを持つ子どもたちの思い、地域に暮らす外国人の思いとつながっていくために、その保護者やまたその保護者の国に関わるゲストティーチャーに来てもらう取り組みが増えてきているように思います。

もうひとつ、県外教独自として取り組んでいることに、「なら国際こどもフォーラム」というのと、「在日外国人生徒交流会」というのがあります。「在日外国人生徒交流会」は県外教の発足の以前から取り組んできましたので、もう今年で１５０回以上を迎えます。「なら国際こどもフォーラム」の方は、この集まりは申し訳ないですが、「保護者の会」のまねをさせていただきましたと言った方がいいかもしれません。オリニキャンプで子どもたちが本当に元気で頑張っている姿を他のルーツをもつ子どもたちのつながりにも生かしていくことができないかと考えて取り組みだしました。

「なら国際こどもフォーラム」が始まってここ１０年たちます。この前の６月１７日にも、１３ヶ国の子ども、保護者、先生方を含めて１８３人の人たちが集まりました。それぞれ、ルーツ別にグループを作って活動し、その中でやはり保護者同士で初めて出会われて、互いに里はどこなのかと中国語で元気よく話していたグループがいたかなと思うと、こちらではポルトガル語でブラジルの料理自慢について話しておられる保護者がいるかなというような、そんな様々な国の文化が花咲いている出会いの場となっています。

今日もおこしの玉田エミリアさんは、ブラジルにルーツをもっておられて、その子どもたちの教育支援にあたっておられます。やはり、保護者の人たちが点在をしていて、なんとか同じブラジルにルーツをもつ保護者どうしが集まれる場も作っていきたいという保護者の思いの中で「なら国際こどもフォーラム」の案内を５年前から８か国の言語で案内文を作りました。各所属にその８か国の言語の案内が回って、はじめてポルトガル語の案内を自分の子どもがもらってきて、自分のルーツと同じ保護者も来られるかもしれないとい

うことで、保護者どうしのつながりの場ができています。ぜひ、「奈良・在日外国人保護者の会」の活動とつながり、今後、より大きな奈良県のなかでの外国人保護者の出会いの場ができていったらいいなと思っています。

(田渕) ありがとうございました。分断された子どもたちや保護者たちを出会わせる、出会わすことでもってエンパワメントされる。そして、子どもたちは子どもたちで同じ立場を持っている子どもたちが、何でもいいから話ができる。親には言えないことが話ができる。親たちもこのように集うことでもって、エンパワメントできる。そして、何よりも先生と保護者でタッグが組めることは重要ですね。

今教育を取り巻く状況で本当に先生たちもたいへんだと思いますね。忙しい中で、雑務の中で授業しているという厳しい勤務状況に置かれています。そして、保護者たちも『モンスターペアレンツ』、もう勝手なことを言ってくる保護者もいますね。けれども、それは保護者を取り巻く状況が、雇用の不安定な問題であったり、格差であったり、長時間労働であったり、そういうことが家庭の中に入ってきて、そのストレスを子供に向ける、どうしようもないことを先生に向けている大きな状況があります。そのような状況の中で先生と親が、本当に分かりあえて、タッグを組んでいくということに今県外教も「保護者の会」からヒントを得ながらやっているんだという報告がなされました。

次に、金先生にこういう質問があります。『現在に至るまで在日の子どもたちが、自分たちが在日であることに負い目を感じなくてはならない現状と背景は色々あると思いますが、最近の例だとどういった形で目に見える差別や偏見があるのでしょうか。それらは、1世2世が受けたものとはまた異なるものなのでしょうか。具体的な解決策、日本人社会にどんなことが求められているのでしょうか』という質問です。

(金) とても大きくて難しい話だと思うんですが、誤解なく申し上げると、在日朝鮮人問題というのは日本人の問題なんです。私たちの問題ではなく、日本人側の問題だと思っているんです。だから、日本人の側の意識の問題であって、いわゆる公的な「公の場の問題」なんです。それをいくら私たち在日コリアンの側から解決しようとしても、やはり自ずと限界があると思っています。学校現場や行政、あるいは地域などの力添えと言いますか協力なしには、この問題は全く解決しないと思っています。

私が授業に呼ばれて行くのは、在日コリアンの子どもがいるクラスに入りますと、私の授業によってクラスの子どもたちは豊かな出会いができる。それが在日の子供にいい影響を及ぼすという期待を持っているからでもあるんです。

最近起きている問題についてお話しますと、レジュメの中にも書かせていただいたんですけれども、僕らが子供の頃に聞いた『韓国・朝鮮へ帰れ』とか、それから『日本のもの食うな』みたいなことが、現実問題として今大阪市でも起きているんです。そのようなことが起きると、差別事例とか差別事象として取り組みますけれども、本当に氷山の一角なんですね。実は、『韓国・朝鮮へ帰れ』という子供は小学校6年生の
子なんです。

今まで全く学校で取り組みがなされていなかったんです。言われた子どもは、本名で学校に通っていたんですが、何の取り組みもされていなかったんです。本名で通っている子

がいないという調査結果が上がっていた学校だったんですね。いったいどういう関わり方をしていったら、本名の子がいないという報告を上げ、６年間なんの取り組みもしないままでいれたのか。たまたま、その場に先生がいて、子どもの報告があって、差別事象として上がってきましたけれども、この子はきっと小さいころからたくさんのこんな辛い経験をしてきたんではないかなと思うと、心が痛いです。やはりこういったことは、現場にいる先生だけではなく、地域に生活する保護者の方々や地域の国際交流協会など、先生が周りの人々をまきこみながら取り組んでいかなあかんのだろうなと思ったりしています。

（田渕） はい、ありがとうございました。次は、パネラーの特定はないですけれども、『国際結婚と核家族化が進み、いわゆる日本国籍の在日が学校現場で見えにくくなっています。本人も自分が実は朝鮮半島にルーツを持っていることも知らないまま大人になる可能性があります。家での行事もないというふうなことで、自分が朝鮮半島にルーツを持たないまま育っているものがおるとの状況についてどう思うか』ということと、『一時、在日朝鮮人教育が、ブームになり、どこの運動会でもサムルノリをやっていた時期もあった。３Ｆ の『ファッション』『フード』『フェスティバル』の『３Ｆ 』で終わってはいけないと思いつつも大切な出会いとして『ファッション』『フード』『フェスティバル』は有効だと思うのですが、いかがでしょうか。』これは誰に聞かれているのでしょうかということですが、大久保先生ですかね。

（大久保） 実は在日コリアンの方の調査を見ると１０年間で半減しているようにグラフではみてとれるんですが、県外教の方でも実はこれは日本国籍を持っているコリアンの子どもたちの姿が見えにくくなってきているからであって、決して在日コリアンの子どもたちが減少しているんだろうとは思っていないわけなんです。

そういう意味ではやはり、先ほどいいましたように、それでも日本籍の子どもたちが、半数把握されているというのが、なんらかの形で学校の取り組みがあるからこそ見えてくるのであって、ぜひすべての学校で、取り組みを拡げてもらう中で先生方が把握するということを大事にしてもらわないといけないかなと思います。

自分のルーツと出会うことのないまま終わってしまうコリアンの子どもたちというのは、国際結婚の子どもたちがお母さんがおうちの中で『お姑さん』や『夫』がその自分の国の母語をしゃべらせてくれないというような状況で、そのお母さんが家庭の中で母語を使えないと、本当にその子ども自身がお母さんの母語を知らないという様な現状もたくさんあって、その子どもたちの問題とは共通していくことかな、ということを思っています。どうしたらいいかというのは、私はぜひソンセンニムや保護者の皆様方にも聞きたいなあというところです。

（田渕） ありがとうございました。

（大久保） 「３Ｆ 」の話なんですけれども、これはもう本当にずっと県外教でも「３Ｆ」でとどまったらあかんというのはずっと思い続けてきているところですが、やはり先ほど金ソンセンニムが言われた通り、自分の机の隣に座っている、地域に住んでいる在日コリ

アンや外国にルーツを持つ子どもとどうつながっていくのかという視点での第一歩としては、「３Ｆ」という切り込み口もとても大切なことかなと思います。

しかし、そうではなくて、ただ単に外国の文化を勉強しようという楽しいことだけをして、自分の暮らしとは何らかかわりない取り組みが多いように思うので、そういう意味での「３Ｆ」なのかどうかということについては、私たちも考えていかなければならないと思います。

（田渕）「３Ｆ」はあくまできっかけなんだということですね。しかし、かつては「朝鮮なんかに文化があるものか」という朝鮮文化への無知が、朝鮮人蔑視を作りだした状況は、３０年以上も前のことだと思いますけれども、その中でやっと民族衣装や音楽や歌や物語が、童話や民話が教材化されるようになった。それで、やっぱり朝鮮との豊かな出会い、このことが実現されはじめたと思います。

けれども、それだけで終わるのではなくて、それをどう進めていくのかということが、課題なんだということですね。金先生の方にはそれとつなげてもらいたいと思うんですけれども、日本の公立学校で在日コリアンという隣人がいることを知らない子どもたちがいるというお話があったと思います。では、在日コリアン理解のために具体的にどの様なことをやらせていますか。

（金）ちょっと大阪の話ばかりで恐縮なんですが、豊中市の取り組みの例を紹介します。今どこの小中学校でもほぼ100％ 英語をやっていますよね。英語の時間になるとネイティブの人が来て授業をする。その方は会社から派遣されたり、教育委員会から派遣されたりしているんですが、豊中市ではどうしているかというと地域にお住まいの方が英語の授業に入るシステムをとっているんです。

だから例えばフィリピンから来たお母さんがたくさんいらっしゃいますね。タガログ語と併せて英語が出来る方がたくさんいらっしゃるんですよ。ポルトガル語とかスペイン語圏から来られた方も英語ができる方がたくさんいらっしゃるんです。地域にお住まいのお母さんは、普段はすごく殻の中で小さく縮こまって生活していらっしゃる、そのお母さんに学校に来て授業をしていただくんですね。先生方には、「これは英語の勉強の授業じゃないんだ。英語を通じてコミュニケーション能力を養う授業なんだ」ということを、しっかり理解していただきながら市内の小学校の全部でやっているんですね。

さらに、豊中の特徴としては、実は英語だけではないんです、もし在日コリアンがいれば、もし中国の子がいれば、フィリピンの子がいれば、そこの国の子の先生を優先的に派遣しているんです。ですから私も豊中の小中学校で英語の授業をしています。いわゆる、画一的な授業の仕方ではなくて、地域にお住まいの方が地域の子どもたちに関わるという、一つの取り組みの参考になるかと思っています。

地域のお母さんが英語を教えることに対して、勉強の癖がありますから、「綴りがちょっと」とかそんな意見もありました。でも、中国やフィリピンからやってきた子ども達が大きくなるにつれて、お母さんのことを恥ずかしく思ったりとかあったじゃないですか。「お母さん、友だちの前で言葉しゃべらんといて」とか、そんな残念な事例がたくさんあったんですが、そのお母さんたちが、学校で授業するようになって、子どもが元気になり、

お母さんが元気になりという事例が報告されています。一つの地域の例ですけども。

（田渕） ありがとうございました。今国際結婚が非常にすすんでいます。最近の統計では日本には約208 万人の外国人がいます。なんと在日コリアンは58 万人まで減りました（ 実はその倍の帰化者もいます）。なんと、中国人が56 万人に増えました。もう２年か３年すると日本の在日外国人の第１位は中国人になります。そしてブラジルの人たちが３０万人です。ブラジル・ペルーを入れると３５ 万人、ブラジルの人たち、二重国籍の人たちがいっぱいおりますから、実態はもっと多いはずです。そしてフィリピンの人たちが約２０万人です。国際結婚は毎年２万７千組です。そうすると１０年経過すれば、２７万組に増えていきます。

国際結婚に共通しているのは、例えばフィリピンのお母さんだと「あなたは、ロザリンじゃないのよ。まゆみちゃんなのよ。」という、姑の方から「まゆみちゃん、まゆみちゃん。」「これはまゆみちゃんだ。」と、そしてタガログ語をそして英語を話すことも抑圧されて、だからほんとは二つの文化をもつ「ダブル」だけども、文化的には「ハーフ」の状況に置かれています。日本文化だけで、母親の文化は抑圧されています。それが、同化を強いる日本の状況です。そして中国やブラジルから来た親たちが日本語ができない、日本語ができない親を恥ずかしく思う。

そして、母親が市役所に行くとき、病院に行くとき、子どもが通訳として、一緒について行っています。これは５０年前、６０年前のコリアンの２世が親を疎ましく思ったり、親のために学校を休んで病院に行ったりするのは６０年前の状況と同じです。ブラジルの人たちや中国の人たちが仕事を求めて右往左往している状況は実は５０年前、６０年前の姿と同じだろうという気がするんですね。

そういう状況の中にあって、まず、国際結婚の子どもたちが自分のルーツを知らない、知らないどころか、棄てられている。よく言うんです、学生達に。学生達が人権教育で同和問題のことについて『部落の人たちのことを良く理解しなくてはいけないと思います』と、他人事のように話します。それに対して、ぼくは言います。「あなたはどうして自分が被差別部落出身でないと分かるんですか？ 」と―― 。親が口を閉じといたら分からないでしょ。

けれども、現在では、在日コリアンの学生達が知らされていない。そういう状況があります。「先生、どうも自分はそのことがクェッションで、国籍は日本だし、でも何か引っかかるものがあるんです。親に話を聞こうと思っても、とにかく言いにくいんです」という学生がいました。それなら「私があなたのお父さんと話してみよう」ということで、そのお父さんと一杯飲んで、話をしたことがあります。

その父親は、教師になりたくて、大学で教員免許を取っても、無駄であったこと、結婚に反対されて、帰化を条件に結婚が認められたこと、だからルーツのことは、自分にも子どもたちにも封印したことなどを話してくれました。その席に同席した学生から、「初めてそのことを聞きました」という経験があります。今大学にも国際結婚した子どもの世代が大学に来つつあります。その学生も授業の中で『自分のお母さんは在日でした。』その話をして、おじいちゃんの方から「絶対そのことは言うな」と釘をさされましたと言っていました。

だから変わっている面と変わっていない面、ほんとに在日コリアン問題じゃない、日本人の問題であることは変わらないのではないかと思います。いっぱい質問をいただいたんですけれども、全部消化しきれていません。今日、東京の方から来ていただいている金瞬哲先生の方から、一言、コメントをいただけないでしょうか。マイクを回しますので一言お願いします。

(会場参加者：金) アンニョンハシムニカ。いきなりで、何も分かっていないので… 。先月の２日・３日にかけて東京で異文化間教育学会というのがありまして、そこで自分が在日朝鮮人の民族的アイデンティティに関するテーマで論文を発表させていただいたときに、田渕先生がいらっしゃっていまして、今日こういった会が催されるので、「是非どうぞ」とお誘いを受けました。

僕も、社会に出てから今まで、悩める青少年といいますか、韓国人・朝鮮人の青少年相手の仕事をずっとしてきていました。それで実際どういったことが奈良では行われているのか、とても興味を持ってやってまいりました。このたび、李和子さんから連絡をいただいて、快く「来て下さい。」という話をいただきましたのでとてもありがたいと思っています。

今日、いちばん感じたこと・学ばせていただいたことがあります。それは、今の世知辛い日本の世の中で、アイデンティティに葛藤のあるコリアンの子どもたちをいかに育てるか、というのはすごい大事なテーマだと思います。これは昔のことではなく、今も続いていることなんですけども、ここで２つばかり「ああこうなんじゃないかな」というヒントというか、刺激をいただきました。

一つは、お母さん達が元気なこと。まあ、お父さんもそうなんですけども、やはり、お母さん･お父さんたちが元気になることがやはり元気な子どもを育てるのだと感じました。もう１ つは、自治体というか日本の方ですね。行政と教育関係者の方たちの力と、私たち在日朝鮮人・韓国人の家族と、もう１ つ、既存のネットワークというか既存のコミュニティといいますか、既存の民族的コミュニティのこの３者がうまく力を合わせたとき、これからの発展の一つのヒントになるのではないかと、現実的な可能性をすごく感じました。

今日前に座っていらっしゃる方たちを見てもそうだと思います。行政が指針などの骨組みをつくって、そこに日本の教育関係者の方が肉付けして、そして主人公としての在日の家族がいて、しんどい中でも民族的な活動をやってきた団体、ネットワークの人たちがそこに力を合わせていく。そういう「三位一体」が求められていると思って、とても勉強になりました。自分自身も働きながら心理学を学び、今年修士をいただいたんですけども、それはやはり、「日本にいても韓国人・朝鮮人であることに自信を持っていいんだよ」ということを根拠を持って言いたかった訳です。これから、今日この機会を励みにしまして、交流しながら、学ばせていただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

(田渕) 今度は博士課程にすすまれるそうです、そういう立場から、博士論文を書いていただけることを楽しみにしております。今指摘されたように既存の民族団体も今日ここに来ていただいておりますので、韓国民団奈良県本部の姜団長から一言お願いします。

(姜)今年６１年目を迎える韓国民団が、どのように関わってきたか、簡単にお話しします。私自身は、在日２世なんです。私は日本で生まれ、日本の教育を受けてきました。私はもう７０歳になりますが、いろんな差別を受けて生きてきました。その中で私の友だちも帰化していった、差別に負けて帰化していった人がたくさんおります。1世・2 世・3 世そして4 世ときていますけども、私たち在日同胞がいかにして生きてきたか、大変でした。その中で、民団は、６０年の間にひとつひとつ差別を取り除いてきたんです。組織の力で取り除いてきて現在があると思います。

そして、教育問題ですが、建国学園の先生もおいでになっておりますけども、近畿に３校の学校があります。京都国際学園、建国学園、金剛学園、私たち在日のための学校があるんです。総連系もあります。そこに行かない人たちが日本の学校へ行く訳ですね。在日は自分の国の言葉が分からない人が多いです。その子どもたちがどうして自分の国のルーツ、言葉、文化を分かるんですか。まず、両親がしっかり勉強して自分の言葉を覚えていただかなあかん。これがスタートだと思います。

私は、独学である程度話せます。話せるけども、完全ではございません。その中で、日本の学校でも、外国人が学校で差別されないように、ひとつ学校の先生方も充分気を付けて頑張っていただきたいと思います。ほんとにありがたいことでございます。この間、県知事さんにお会いしたときに、知事さんも韓国通でございまして、これからもいろんな事を協力してやっていきましょうと、約束も受けております。今後とも、勉強していただきたいと思います。ありがとうございました。

(田渕) 民団も教育問題に非常に関心があり、こういう制度もやってますということでした。時間がどんどん経過していますが、「ユースの意見を聞かして欲しい」という質問があります。ユースの誰か、私たちはこんな事を学びましたということをお願いします。

(趙) そうですね。ユースの思い。ユースはこの１５年、保護者に育ててもらって、成長してきたわけなんですけれども。自分たちも、朝鮮半島にルーツを持つ同じ世代の子たちと、どれだけ多く集い、どれだけ多く自分たちの思いを出して伝え合えるか、そのことを私はすごく重要だと思います。だから、いろんな人と出会いたいし、そういう場を、今度は私たちユースがつくっていけたらと思っています。

(田渕) ありがとうございました。まだまだあるんですけども、時間が無くなってしまったので、あと一言まだお話しをされていない鄭さんと土谷さんの方にお話しをしていただければと思います。よろしくお願いします。

(鄭) はい。今いろんな質問を聞きながら、やっぱり、新渡日の人たちと私たち在日コリアンは、共通の問題があるんですね。私たちは自分の思いを伝え、発信できる場を作り、そして言える力をエンパワメントしてきた！ そして、保護者という立場で、日本の学校で「見えない存在」とされていた「外国人の子どもたち」を見える存在にしてきました。これは、「保護者の会」15 年の大きな成果だと思うんです。

私たちの民族性をしっかりと成長させ培うことが、日本の人たちにとっても多文化との

出会いになり、それが同じ地域社会で共に生きていく、共生していく礎になると思います。在日コリアンだけでなく、子育て中の外国人保護者や子どもたちが出会い集える場、エンパワーできる場をどのように作っていくのか、私たちが外国人市民として生き生きと暮らせる場をどのように作っていくのか、これからの課題が示されたと思います。

今日、この場に集まって下さった方々と共に、民族的アイデンティティを育成する教育の必要性は再確認できたと思います。外国人の子どもたちを視野に入れた多文化共生教育を、それぞれの立場、それぞれの場所で進めていきましょう。私たち保護者も、行政、学校との連携・協働に力を惜しみません。協力したいです。実際、生駒市では、「保護者の会生駒」の保護者が中心になって「ＮＰＯ法人いこま国際交流協会」を立ち上げ、「多文化共生の街づくり」を目的とした地域活動が始まっています。「保護者の会」のこれからの方向性の一つとしてご紹介したいと思います。

近年、率直に言いますと、多文化共生教育が進められる一方で、同化や排除になりかねない教育が進むのではないかという不安も募っています。外国にルーツを持つ子どもたちが多数在籍している現実を直視した教育改革が求められていることを、「保護者の会」も当事者として、各地域で、また県の「保護者の会」で集い、パワーを貯えて発信していきます。今日は本当にありがとうございました。

（田渕） ありがとうございました。それでは、これは土谷さんへの質問でもあるのですが、「行政の活動における、今おっしゃった、保護者の会の活動のように、『見える化』が必要だと感じる。すなわち視覚化する。目に見えるかたちで、行政において視覚化に関する計画・思いがあれば教えて欲しい」というのがありました。人々への意識の伝え方、活動、まあ啓発活動を含めてということでしょうけども、行政としてどのように、この外国人の教育の問題を、地域における多文化共生教育の見える化をやって行くのかということを聞きたいということです。

（土谷） 私どもの今の思いを伝えさせていただくことで、お答えにしていただきたいと思います。

一つは、新渡日の皆さん方にということで、先ほどからたくさんのご意見がございました。私がレジュメの２番目に書いたのもそのことで、平成５（1993）年に、市町村教委がそれぞれの就学年齢に達した子どもたちの家庭へ送る就学案内について、しっかりと在日の様々な人々に対して分かるような文書を送ってほしいということを依頼し、昨年度もその書類を出したところです。子どもたちに就学の機会を逸することの無いように、市町村の教育委員会のみなさん方の協力を得ながら、就学保障に努めてまいりたいとそのように思っています。

具体的な部分で、新渡日の子どもたちは、日本のそれぞれの学校へ就学しています。県では、いろんな国の言葉で、子どもたちが分かるように、例えば日本語の算数に出てくる語句をポルトガル語やスペイン語、中国語で訳しています。同じように理科や社会科でも同様につくっています。また先生方に対して、新渡日の子どもたちが学習になじめるようなワークシートを配布したりもしています。

それから、差別という話がございました。県で把握しております昨年度１年間の外国人

に対する差別として報告を受けていますのは２件です。高等学校で１件、それから児童館活動で、中学生・小学生が一緒にいたところでの外国人に対する差別発言です。この中身それぞれありますが、先ほど金先生がおっしゃいましたように、差別事象というのは、差別を受ける側の方には何ら責任のない話であって、差別する側の認識の問題である。意識の問題である。というのは、皆様方も当然、考えておられる中身だと思います。県もまさにそのスタンスに立っているところです。

「人権教育推進プランについて」と、3 番目に整理をしておりますけれども、基本的な視点としては、そこに書きました三つをきっちりと押さえる学校教育の展開をお願いしたい、していただきたいということを示しております。また、このように人権教育をすすめていくときに克服しなければならない課題を、２点考えています。

一つは、「人権は大切だ」或いは、「差別はいけない」という認識は、皆さんそれぞれお持ちであるところです。しかし、認識はしているけれども、それは知識の蓄積であって、それだけでは世間の流れに負けてしまうことがある、そのように考えております。

２点目は、様々な差別問題がございますが、根底に共通するもの、それは人間の尊厳を侵すこと、それは差別意識なのだ、ということをもう一回考えさせたい、そのような思いでもって、このプランをつくりあげました。その下には、基本の方向、人権学習・人権教育をすすめる方向性を４点に示させていただきました。これはそれを見ていただければ理解いただけると思います。

県では、各学校や先生方に対し「それぞれの学校における教育課題は何なのか」ということをしっかり見ていただきたい、ということは常々申しておるところです。それに加え、今の学校教育、学校だけではまいりません。といって家庭だけでもまいらない、また地域だけでもまいらない、その三者、あたりまえの話かも分かりませんが、学校・家庭・地域という三者でもって、教育というのはすすめられるものだと考えています。どうか皆様方のいろんなお力をお貸しいただくことによって、奈良県の教育を支えていただければと願うところです。

そして最後でございますが、本年度県の教育委員会としましては、人権教育をすすめるときの基本方針を策定しようと今取り組みをすすめているところです。また、皆さん方にご意見を頂戴する機会も考えています。どうぞ、いろんなご意見を聞かせていただき、奈良県の人権教育をすすめる大きな柱となります基本方針をつくってまいりたいと思います。勝手な行政サイドの話ばかりさせていただいてきましたけれども、どうぞよろしくお願い致します。

（田渕） 時間がきてしまいました。もう一回整理をいたしますと、バラバラに分断されていた２世、その２世たちは生きるのが精一杯であって（ これは今中国やブラジルから来た人たちに共通するんですけども）、自分たちの文化に触れることがなかった。その２ 世たちがまず出会い、つながった。そして出会うことでもって、エンパワメントされ、そして子どもたちも出会わすことができた。

孤立している子どもたちを組織化することができ、子どもたちはそこの中で居場所を見つけて、何でも言える、親にも言えないことでも言える、そういう場をつくってきた。そして、そこのカリキュラムで言葉であるとか、文化であるとかこれも日本の学校におる限

り与えられない、いわば日本の文化から切り離されている。それを、文化であるとか、言葉であるとか、今日のような自然なかたちで、みんなが鮮やかな衣装を着る中で、そのことが「当たり前なんだ」、という場をつくっていく。そこに民族講師やユースを見ながら、子どもたちが「あんな人間になっていこう」という「ロールモデル」すなわちアイデンティティの対象になっていく訳です。「あんなお兄ちゃんになっていこう」というのが教育には大切ですね。それを意図的に、この「保護者の会」はやってくれたんではないか。そして文化を通してずっと繋がっていく。

そして、先生と連携することで、地域と繋がっていった気がします。そういう面では、この「保護者の会」の果たした役割は非常に大きい。そして、それが在日コリアンが中心に行われてきた。これはここに来ていらっしゃる金さんがいつもおっしゃることだけども、「日本人を一番よく知っているのは、在日コリアンですよ」ほんとに、在日コリアン自体が日本社会を実は豊かにする存在です。おっしゃったように、我々が外国人を見る目を養うという面では、相手の文化に立って、相手の文化に則して見ていくことが必要です。

今、私が手にしているのは眼鏡です。（眼鏡を外して手に持って示しながら――）この眼鏡のフレームそのものが、実はゆがんでいるのが日本人かもしれないのですね。この歪みを正してくれ続けたのが、マイノリティとして生きてきた在日コリアンであった。どうしても我々日本人の間には「日本人中心主義」、「自文化中心主義」（エスノセントリズム）の歪みがあります。また、「同じことがいい」と考える「等質性信仰」が巣くっています。実はこれが「差別と区別を混同する」原因です。違いを違いとして認めることができないことが、次のような形で出てきます。

高校生や大学生段階の若者が、相手に誠実でありたいと思い、自分の親友に「私は在日コリアンなんだ」と必死の思いで訴えるのです。けれども、訴えても「そんなことは気にしていないよ。前と同じように付き合うよ。」という答えが返ってくるのです。そのことでコリアンの学生はガクッとくる訳ですね。それは何かっていうと、「自分のアイデンティティを認めてくれ」ということを言っているんですね。それに対して、いわゆる「善意」や「優しさ」から、「いいよ。全然気にしない。前と同じように付き合うよ」と答えているのですよね。

けれども、同じであるはずはないですね。指紋は押しに行かんといけん。選挙権はない。そして国籍条項はある。そんな違いがある。そのような違いがあるにも拘わらず、「同じように扱うよ」と言うこと、同じように扱うことがさも親切であるかのように、思うこと。そういう無意識の日本人のあり方に気づくことが第一歩ですね。日本人の日本人中心のあり方を、相対化していく、それが多文化共生で、実は多文化共生にいちばん求められているのは、日本人の日本人中心の考え方、そのことに気付いて、そのことを今まで発信し続けてくれた人が、奈良の「在日・外国人保護者の会」であろうと思います。

そして、「在日・外国人保護者の会」は、これから新しくやってきたブラジルの人、そして中国から来た人々を今度は繋ぐ役目があるという、これからの新しい課題が確認されたのではないかと、勝手に思っております。皆さんの意見も充分聞くこともできなくて、パネラーの方々にも充分時間を差し上げなかったんですけども、申し訳ありませんでした。皆さんのご協力でパネルディスカッションを終えることができました。どうもご静聴ありがとうございました。

第３章　　保護者と教師の連携した民族教育

―申点粉氏のライフヒストリーを通して―

１．家族構成

私の家族ですけれども、男前の夫が一人おりまして、２５歳のかわいらしい娘がいます。そして、私にそっくりの２２歳になる息子の４人で暮らしています。また、韓流ブームが始まるきっかけになった「シュリ」という映画が梅田で公開されたころにやってきた、「フラットコーッテットレトリバー」という大型犬、顔の細長い男前の「シュリ」という犬が一匹、私と気の会う親子です。一応、４人家族といいましたが、「シック」「ウリシック」といったら、家族のことなのです。ヨン様が、ファンのことを家族と言っていますが、「食口」と書いて韓国語では「シック」と呼んで、同じ屋根の下で寝起きを共にし、同じご飯を一緒に食べる、それは、動物、犬や猫でもわが家族、「ウリシック」になるのです。つまり、うちの犬も、家族と一緒ですね。そして、４人家族で、兵庫県加西市に住んでおります。それまでは、阪神大震災のときまで、宝塚で生まれ育っていたのですけれども、その際に家がつぶれてしまって、加西に移り住んで今年で１７年目になります。

２．父親のライフヒストリー

私にはお父さんとお母さんがいるんですけれども、１９２５年に私の父は釜山の港から船に乗って、下関にやってきました。その当時、日本は朝鮮という国を植民地支配していましたから、パスポートなどを持たずに、渡航書一枚で日本にやってこられたのです。船賃も一切いらずに。そして下関について、そこから東京に行き、東京で仕事を紹介されて行ったところが、北海道、いま有名になっている夕張の炭鉱に送られました。そこで朝から晩まで働いて、自分が食べるもの、朝は暗いうちから家を出て、夜も真っ暗、仕事の石炭堀も真っ暗なのですけれど、それでも、一食すら満足に食べられないので、これではいけないないということで、もう少し他のいい仕事を世話してくださいといったら、今度は四国の炭鉱所に行けといわれ、四国に行きました。

そうこうしているうちに、私のアボジ、オモニに子どもができて、２番目の姉は四国の綿山で、掘った石炭を運ぶのに、トロッコという車を使うのですが、そのトロッコに足を轢かれて、親指が無くなっています。その２番目の姉が親指をなくしたことが、私のアボジが炭鉱で働いていたことの足跡になるのかな、という感じです。そして、それでも、炭鉱所の仕事はやはり劣悪なので、これでは食べていけないということで、知人を頼って、宝塚にやってきて、私はそこで１９５０年の８月、７人兄弟の末っ子に生まれました。お父さんお母さんは、言葉もろくに喋れない中で、まして、あの戦時中、戦後、日本人も敗戦の後大変でしたけど、在日は、もっと大変だったのですね。それを爪に火をともすようにしながら生活していたんです。常日頃、私の父と母は、ほとぼりが冷めたら田舎に帰り

たい、帰るのだ、といっておりました。結局、日本で亡くなってしまいましたけれども。

父が生まれたところは、慶尚北道、大邱のところで、皆さんご存じないかと思いますが、４～５年前に地下鉄の火事で事件があった大邱というところの近くなのですけれども、父が生まれた当時、そこははるか見渡すかぎり申家の田畑だったのです。「え～、アボジそんなお金持ちの息子やったらなんでこんな日本に来て貧乏な暮らしをしているの」なんて私はよく言っていました。そして両親は、病気のまま亡くなってしまったのですけれども。

私は４～５年前、兄と２人でおじいちゃんの墓参りということで韓国に行った際、みんなが日本から親戚が来たということで、喜んで宴会を開いてくれたのですが、その時に私が「常々父から聞いていたのだけれど、我家はお金持ちだったというけど信じられない」という話をしたら、「なにを言っているの。本当にそうだったのよ。」ここだけでは、見渡す限り申家の田畑で、あったけれども、ここだけじゃなく、ソウルの上の江原道というところ、北朝鮮の３８度線の境目あたり、あの江原道のところにもあったし、それとまた、ずっと南のほうにあるのだけど、天道よしみが歌うたってヒットした「珍島物語」って皆さんご存知？あの歌聴くたびに、私におじいちゃんの田畑があったんかな、と。あそこにも大変広い田畑を持っていたというのですけれど。

日本の国が１９１０年、植民地支配したことによって、最初にしたのが「土地調査事業」。その時に、日本人の役人の中に、朝鮮という国は、名義登録しない国だということに気がついたのです。家や田んぼや畑や山に、名義登録する習慣がなかったのが朝鮮人だったのです。４０００年の歴史の中で紐解いてみると、７年に１回は大陸から侵略されていたのですね。そういうこともあってか、本当に名義登録をしない。人にあったら、「よく寝られましたか」「ご飯たくさん食べられましたか」というのが朝鮮の挨拶で、無事に眠れたこと、満足に食べられたことが何より幸せという国民性でした。そこにある日突然、村のはずれに立て看板立てて、「土地の持ち主は申請しなさい」ということを、期間を短く行なったんですね。日本語のわかる役人はみんな日本人なのですが、「おいおい、これ何書いているの？」「どうも、申請したら税金取られるらしい」「何でわしらが日本人にそんなことされなきゃならんの？」といっているうちに、期限が切れてしまったら、申請者無しとして、日本人のものになってしまった。１９１０年から１９１９年の約１０年間で、朝鮮全土がほとんど日本人のものになってしまったといわれるくらいの事業でした。我家も、江原道や珍島は人に預けていて、私のおじいちゃんが直接申請するわけには行かないので、気がついたら没落していました。

３．母親のライフヒストリー

私の母は、その申家に下働きに行っていて、長男は、全盛に頃に結婚できたのですが、没落してしまい、次男の嫁が、あてがないので、私のお父さんのお母さん、おばあちゃんが、わたしのお母さんを呼んで、「うちの次男の嫁になろうね。」といって、長い髪をといて三つ網になんかされてわれたら、「嫌です。」なんていえず、また、父は少し男前だった

ようで、お母さんは「うん。」といったのです。私の母は、私にそっくりで、背は低くて、顔は頬骨が出て、でも私に父にしたら、もっと別嬪さんを結婚相手にしたかったらしく、お母さんが気にいらなかったそうです。そこからまた悲劇が始まってしまったようなのですけれども。そうして、下働きしていた嫁さんを連れて、没落してしまった申家を立て直すために、仕方無しに、自分の意思で日本に稼ぎにやってきたのが、私の両親です。年代的にも１９２５年ということで自分の意思で来た事も私も父から聞いていましたし、勉強してみても、強制連行や創氏改名なども１９４０年から１９４５年までのことですから、そのとき既に私の親は東京で暮らし、鎌倉でも暮らし、北海道、四国、そして宝塚に住んでいました。

それほど、父の意識は次男であるゆえ没落した申家を立て直すために、爪に火をともすようにして、劣悪な日本の朝鮮人社会は大変な中で、仕送りをしたお金で、江原道、珍島などはありませんが、本籍地の村では１番か２番というくらいお金持ちになりましたし、いとこ、おじさんの本家と、分家はこんなにも違ってしまいました。おかげさまで本家では、いとこの娘や息子は、ソウル、市庁の公務員になっていますし、もう一人の姪っ子は、韓国でも有名なサムスング電子に就職し、５カ国後を流暢に話し、アメリカやヨーロッパや東南アジアの通訳をしながらバイヤーの仕事をして頑張っているようです。そうしたものを見て帰ってくると、私はとても寂しい気持ちになります。韓国で暮らす本家と日本で暮らす分家がいったい何なのか、と寂しい思いをして帰ってきます。

４．私の学校時代

当時、民族学校は北朝鮮よりの朝鮮総連系の学校外多かった中、５０世帯くらいの韓国人の知人の親がお金を出し合って宝塚民族学園という学校を作って、兄も姉もみんなそこに通い、私も最後の卒業生になってしまいましたが、小学校は民族学校を出ました。でも廃校になるまではほとんど自由時間で、小学校５年、６年で勉強はほとんどしていませんでした。遊びが上手で、いつも男の子とどこでなにして遊ぼうか話していて、人形などで遊んだことは一度もないです。「今日は陣地合戦しよう。」といって、野原へ行って男対女で頑張りました。しかし、男の子の方が強いので、なんとか男の子に勝ちたいと知恵を働かせました。その頃から、男の子に負けたくないという闘志はあったようです。「悔しいから会議しよう。男子はあっちに行け」といって、「あの子らがこっち走ってきたら、深くはまらない程度に、転んではまるように穴掘っておこう」と計画を立て、膝くらいまで穴を掘って草をかぶせて、陣地合戦をして、相手が来たら見事にはまって、男子に勝ち、「女子の言うこと聞きなさい」といって、男子を牛耳っていたように、天真爛漫に遊んでいました。

しかし、いよいよ日本の中学校に行くことになりました。勉強もろくに出来なかったのにいきなり日本人の中学校に行くことになり、とても不安でした。そんな時に、上の姉さんに呼ばれて「これから日本の中学行くでしょ。姉ちゃんがかわいらしい日本の名前付け

てやるから、その名前で学校に行きなさい」といわれ、１２歳の女の子が姉にそういわれたら、嫌もいうこともありませんでした。ああ、そうなのかと思い、姉に「なんで？」と聞くと、「私たちは朝鮮の名前で行ったら、朝鮮人だからといって差別され、いじめられたから、せめてあなただけでも愛らしい日本の名前で行ったら、いじめられるのもちょっとはましかもしれないから」という姉心からつけてくれたと思います。それで、名前が「申点粉」から「平山まりこ」になりました。私はその時、かわいらしい名前だなぁと思い、「今日から私はまりちゃんになるのかなぁ」、と言っただけで、自分がかわいい「まりちゃん」になってしまいました。そうして、中学校に行くことになりました。

しかし、その中学校に行くまでにも、難関が待っていたのです。その当時、朝鮮人は義務教育の対象に入らないということで、直接、親と先生が中学校の校長先生にお願いに行くことで、その校長先生の裁量次第で入学できるかが決まるのです。「先生、この子をこの学校勉強させてあげてください」といったら、校長先生は、「朝鮮人の子ですか」といいました。私は急に下を向いてしまいました。「朝鮮人の子は問題が多いですからね」といわれると声も出せず、この学校は朝鮮人のことを嫌っているということを否が応でも知らざるを得ませんでした。そんな中で、「この子を何とかお願いします」ということで、やっと許可されたときに、一筆書かされました。校長先生は決して言いません。担任の先生から、「迷惑を掛けません。もうかけたときは辞めさせていただきます」という内容を、自ら進んでの一筆ということで書かされたのです。そういうことを書かされて入学したので、私はいつも、いつ退学させられるのではないか、とおどおどしていました。

そして、授業に入ると、知らないことばかりで、分からない所を、手をあげて質問をして、その教科の担当の先生にこんなことも分からないのかと思われ、職員室で私がターゲットに入ったら辞めさせられてしまうかもしれないので、質問は絶対にしませんでした。４５分の授業が終わった後、みんなは教室を出て運動場へ遊びに行くのですが、「ちょっとごめん」と前に座っている女子を捕まえて、分からないことをクラスメイトに聞いていました。もちろん、前の子にばかり聞いていたら、面倒くさい子だと思われるので、次は横の子に、消しゴムを借りるふりをして教えてもらい、前や後ろを上手に回して教えてもらうことで、私は授業に参加することができ、２年生の頃に、１学年が２４０名いたのですが、成績が張り出されると６０番～７０番目で、「平山さん朝鮮人なのにすごくかしこいね」といわれるくらい、もちろんまだまだですが、自分で一生懸命勉強すれば、何とか日本の学校でもついていけるのだと感じました。つまり、担任の先生や教科の先生ではなく、私の本当の先生はクラスメイトだったということを考えると、非常に私は恵まれていたな、と感じます。

そして勉強するのが楽しくなり、今度は高等学校を目指しました。２４０名中６０～７０番目でしたら、大体は公立高校へいけたので、毎日家に帰ったら父と母に「月謝は自分で稼ぐから高校へ行かせて欲しい」といったのですが、父と母は全く賛成してくれませんでした。私は、母が４２歳、父が４６歳のときに生まれたので、当時、朝鮮人社会では５

０歳くらいで相当な苦労をしていますので、父とは母既におじいちゃん、おばあちゃんのようなものでした。私も家の中ではお母さんが好きでたまらないけど、一歩外に出ると、年寄りに見られて恥ずかしいので、お母さんに声をかけるのが少し嫌で、隠していましたし、中学校に行ってからは、宝塚の逆瀬川という繁華街へ行く際は、朝鮮人としてばれたら困るので「クラスメイトにあったらお母さんから離れてね」といいました。「平山まりこ」という名前を使った瞬間から、誰も教えてはくれませんが、日本人のふりをするという習性が身についていたのです。とても好きなお母さんだけど、一緒に出かけると誰もいなければいいけど、自分から離れるのは嫌なので「誰か知っている人がいたら、自分から離れてね」とお母さんにいうと、お母さんは、何も言わずに分かったということで、友達に会わなければ、良いのですが、友達が「まりちゃん」と声をかけてくると、私からすっと離れてくれました。そのことが、未だにわたしの傷になっています。

そのことから、だだをこねることはしないつもりでいたので、母は「あなたはいつの間にかこんなに大きくなったのね。あなたはだだをこねることはなかったよ。」ということを言ってくれましたが、中学校３年生のときは、３日３晩泣いて父と母に学校にいかせてとお願いをしました。皆さんは勉強が好きですしそんな経験はないとは思いますが、みんなに話したら、「申さんそんなに勉強が好きなの？」と聞かれましたが、当時は本当に勉強が出来たらよかったのにと思うのです。しかし両親はそのときもずっと本国へ仕送りをしていましたから、「月謝は要らない、自分で払うというけど、あなたが働いて稼いだ月給は誰が持ってくる」という両親の言葉を聞かされると、ぐうの音も出ず、「もういいよ」と、私は仕方なく働くことにしました。その時、中学校３年生の廊下で泣いたことは今でも忘れません。進学コースの子達が教室に入ったとき、廊下で声を出さずに泣いてしまいました。私もあそこに行きたいけど、どうしていけないのだろうと。

５．社会に出て感じた差別

仕方なく、私は１５歳で働きにでました。第一コンデンサという会社で、カーラジオを製造する会社でした。そこで、ベルトコンベア電気を入れて、半田ごてで基盤を溶かしていく仕事でしたが、１ヶ月から２ヶ月、月間で発表する中で「平山さんは女子の中で１位」ということで表彰され、人間頑張ったらこうして褒めてくれるんだなぁということがとても嬉しくて、もっと頑張って働いていました。そのうち、同僚に人たちとも仲良くなり、「平山さんとお饅頭一緒に食べようと思って持ってきたよ。３時のおやつに食べようね」といってくれる同僚に出会えて、なんとも嬉しい気持ちになりました。この私にそんなことを言ってくれる人がいるのかと。「帰りにおいしいお好み焼き屋に行こうよ」言われ、そのときは既に稼いでいて、こずかいもあったので、「うん、いいよ」といって食べに行きました。クラブは卓球部に所属して遊んでいたのですが、そのときに友達が、「平山さんと話していると楽しいので、家に帰ってからまりちゃんの話をしたら、お父さんもお母さんもお姉ちゃんも一度連れてきてご飯を一緒に食べましょうと言ってくれたので、うちで一緒にご飯

を食べようね」と言ってもらい、とても嬉しかったけれども、一方でドキッとしてしまいます。食卓を囲んだらさぞかし嬉しいし、みんなもそう思ってくれるので、いって一緒に食べたいけれども、私が食べてしまったら、今度は私がその友達を家に呼ばなければならなくなるという思いがあるので、「ごめんね、用事があるの」といって断っていました。あの時代でもそうですし、現在でも、他人と仲良くして、夕飯まで招待してくれる関係というものは作ろうと思っても出来るものではなく、そんな環境の中で、自分の意思でそれを全てカットして、その友達とこれ以上仲良くしたら自分が朝鮮人としてばれてしまうと思い、辞めていました。今考えてみてももったいない、素晴らしい友達を自分から捨て去ってしまった。朝鮮人であることがばれたら仲良くしてくれなくなる、口を聞いてもらえなくなるのではないかという、何ともいえないむなしい思いで生きていました。また、西宮で市長選挙があり、「平山さんはどこの党の誰を応援しているの」と聞かれることもありましたが、私には全く縁のないことなので、しまったと思い「トイレに言って来るね」といってその会話から離れていました。日本で生まれて、日本で生活して、日本の会社で働いて、市、県民税という税金を払っていても、われわれ在日韓国・朝鮮人には参政権がありません。「私参政権なんて知らないの」なんて言ったら、また朝鮮人とばれてしまうので、そこから逃げてしまうわけです。さらに、朝鮮人青年が数珠繋ぎで自転車を盗んだ、バイクをとった、窃盗犯グループだということで、未成年者であるけれども、ラジオやテレビでは報道をするのです。「なんで朝鮮人の子ども達ばかり何故あんな悪いことするの」といわれると、私は耳をふさぎたくなるくらい辛かったです。なんで朝鮮人はただでさえ嫌われているのに辞めて欲しいという気持ちになりました。私たちはそのニュースを聞くだけで萎縮してしまいます。

たまたま、私たちが住んでいた宝塚というところには、武庫川という大きな川があるのですが、あるとき、小学校３年生の男の子が川でおぼれているのを青年が人命救助して、その少年の所在地が尼崎だったので、そちらで表彰される新聞記事を見たとき、「あ、この人、韓国人だ」と思ったのに、けれどもその新聞記事には一言も、韓国人、朝鮮人、日本人でもない、「○○さんが人命救助をしました」と書かれていたときに、悪いことは本名で報道するのに、めったにない、いいことをしたとき、実はこの青年は在日コリアンの２世で、日本人の小学生を救ったのだということを聞けば、悪いこともするけど、いい事もして、よかったなという気持ちになるのですが、悪いことがあったら朝鮮人で、いい事があったら、さも日本人がしたことのようにするというマスコミのシステムも、私は嫌いでした。私たちは何も悪いことをしていないのに、なぜ朝鮮人ということだけで怯えて暮らさなければならないのかと思いました。また、私に日本人の名前をつけてくれた姉ちゃんが、「あれしたい、これしたいと夢を持ってはいけないよ。どうせ夢はかなわないのだから、夢だけは持ってはいけないよ。」と言うのです。ですから私は、どうせかなわないなら、と本当に夢を持ちませんでした。私はこの日本で生まれ育ったにもかかわらず、何でこんなに怯えて暮らさなければならないのかと思いました。本家との手紙のやり取りがあり、貧

しいことは知っていましたが、でも、お父さんお母さんが生まれたあの韓国は、貧しいけれどもこんな気持ちで住むことはまずないだろうと、ひそかに私は思いました。何か言ったら日本人は、拉致の件でも「朝鮮帰れ」「おまえら金正日や」と言うけれども、私はふたつの名前を上手に使い分けていましたので、直接的には「おまえ朝鮮人や」と差別されたことはないので、私は女優業が向いていたのかなと思ったりもしました。直接的にいじめられたことはありませんが、心の中では、こんな暮らしにくい日本は嫌いだと、例え貧しくてもいいから、父と母が生まれたあの韓国で暮らしたいな、とひそかに思うようになって、私は頑張っていました。

２０歳の頃には、両親は過酷な仕事をして、美味しいものを食べず、みんな本国に送るために、気がついたら体がぼろぼろ、お父さんは気がついたら結核になって、療養のため隔離しなければならず、そして、結核の薬は非常にきついものなので、ちょっと耳が聞こえなくなったりして、「アボジ大丈夫？」言っていると、今度は膝が動かなくなったということで、何年か療養していたら結核は治ったのですが、今流行している認知症にかかってしまい、するといつも故郷のことや両親のことを話しており、母はそうした夫を支えるために、１１月から、失業安定所に行き、土木の仕事に就き、両親ともずっと働いていましたので、父はそういう状態、母も肝臓がんになってしまい、７人兄弟のうち私が一番末っ子で、姉はみな結婚して、家におりませんので私が両親の面倒を見ることで、会社を辞めてしまいました。そしてお父さんの病院、お母さんの病院と通っているうちに、少し小康状態にでもなったら、パートでもして働かなければならいなと思いましたが、今度働くときは「平山まりこ」ではなく「申点粉」という名前で働きたいなと考えました。

一生懸命働いたら、みんな可愛がってくれるという自信を持ちましたので、履歴書を書いて、「申点粉」という履歴書を持っていきました。当時は、日本が高度経済成長期でしたし、まして中学校を卒業した人材は「金の卵」といわれるくらい人気があったのですが、「申点粉」で面接に行くと、本当にどこの会社も雇ってくれませんでした。「すみません、あなたの前で決まってしまったのです。どうぞお引取り下さい。」私を面接して、採用しようという意識が全然なく、「本当にそうなのかな」と思いながら、仕方なく帰るわけです。そして、４～５日してその会社の前を通ると、「募集・急募」という張り紙が張ってあるのです。「この会社は、私たち朝鮮人を嫌っている。けど、私もそんな会社で働きたくない」という意地を張っていました。どこに行ってもないので、仕方なく家の引き出しにしまっていた「平山まりこ」という名まえを、写真や経歴はみんな一緒ですが、名まえだけ変えていくと、「あなたのような明るい人は、明日からでも家で働いてください。」といわれ、働くことになりました。やはり、目に見えない差別があるので、皆さん気がつかないですけれども、このような就職差別をされる。就職というのは死活問題ですから、仕方無しに日本人の名前を使うということも、分かってもらいたいと思います。

６．韓国に留学して受けた在日差別

そして私は２４歳のときに５０万円を溜めました。今から約３５年前になります。「お父さんお母さん、私前から思っていたのだけれど、日本で暮らすのは嫌だから、韓国に行って永住しようと思う。お父さんお母さんも帰りたいといっているし、私が先に行って一生懸命働いて待っているから」と言ったのですが、お父さんお母さんから「あなたは韓国語も喋れないのに、どうして暮らしていくの」、まして私は田舎ではなくソウルで暮らそうと考えていましたから、大反対にあいました。しかし、私の意志は曲げられませんでした。とりあえず、韓国語を勉強するという形で行かせてと、いうことで、今でも有名な、去年黒田福美さんがソウルの延世大学の語学堂、韓国語に関して韓国でも超一流の語学堂なのですが、私は３４年前にその延世大学の語学堂に自費留学することにして、友達の家にホームステイしました。バスに乗ったら１時間ほどかかる遠いところでしたが、仕事もしないでその延世大学に韓国語を習いに行きました。

夢にまで見た韓国であり、高等学校にも行けなかったぶん、ソウルの延世大学でのハングル講座は、私にとっては一つ聞いたら前部体に染み込むくらい楽しくて、素晴らしい授業でした。クラスが８名で、男性６人女性２人のクラスだったのですが、本当に楽しくて、今日は、途中でバスから降りて、アイショッピングしながら韓国の人と出会って接触したいと思って、「おばちゃんこれいくらですか？」「日本人のあなたが、上手に日本語喋るのね」といわれたので、「おばちゃんちがうのよ。私は日本で生まれたけど韓国人なのよ。」とすごく喜んで言ったら、おばちゃんは「えぇ、日本人ではないのか」という顔をするのです。まぁいいかと思い「さよなら」とその場を離れたのですが、そうしたことがしょっちゅうありました。授業は、一生懸命するので、手紙も、いとこの家に「オッパ、アニョハセヨ。今、延世大学でこんなことして楽しいよ。」ということを便箋に１０分くらいでかけるようになりました。そのいとこは、韓国の高校を卒業した人間でも手紙には誤字が歩けど、おまえは偉い。賢い。頑張っているのだね。」と褒めてもらいました。そうしていたら、夢の中の会話も韓国語で喋っているのを見ると嬉しくて、一日も早く韓国人になって私はこのソウルに住むのだ、という思いがありました。

そして、１０週間の授業が終わって、次は日本に帰るのか、それとも韓国に残るのか、ということを延世大学の前にある喫茶店でコーヒーを飲みながら喋っていたら、その中にも日本人もいましたので、喫茶店のおばちゃんが、「あなた達日本人が韓国語習ってえらいし、上手だね。本当に私たちは嬉しいよ。」といって、日本人にはすごく親切なのです。しかし、「おばちゃん、私は韓国人なのですよ。」といったら、「え。」といって、今までどおりなんか変なのです。いままでは、その後すっと離れていたのですが、喫茶店のおばちゃんですから、「あなたね、さっきから日本で生まれた韓国人だというけれど、私たちから見たらもう日本人にしか見えないのよ。」と言われました。よくみても、半分日本人で、半分韓国人にしか見えないのに、「蔑視」、いやらしい言い方ですけれど、私はその言葉で本当に傷つきました。またか、という感じでね。いままではそれで終わったのですが、そのおばちゃんは、「こう言っては何だけど、あなたは日本で生まれ育った在日同胞だというけれ

ど、私たちからしたら、１９４５年の８月１５日に、日本が戦争に負けたことによって、私たちは植民地支配されたのが解放された素晴らしい日であるのだよ。その当時、日本ではいろんな形で、強制連行もあって、約２５０万人もの朝鮮人が日本にいたけれども、あの敗戦の後、こぞって本国へ帰ってきたけれど、本国に帰らなかったお前達のお父さんとお母さんはアホばかりなのだよ。在日といったら、アホばかりだ。」というのです。おばちゃんよくそんなこと言うな、と私は胸が詰まって、声が出ませんでした。それに比べて、在米韓国人はいい職業でいい生活しているけれど、日本にいる在日は、日本人に差別されながらも、「アホばっかりだから嫌いだ。」というのです。あの小さな朝鮮半島が３８度線でふたつの国に分断されても、ここまで経済発展したのは、われわれ在日の力も絶対あると思いますし、私の両親、私の家族が、爪に火をともす思いで、自分達が食べないでも本国に送っていたあの経済というものは、すごく大切な大きな経済だと思うのです。そのことをおばちゃんたちが知らないわけはないけれど、そういうことを無視して、私たち在日コリアンを差別、蔑視する習慣があることに気がついて、私はこれでは韓国で住んでいくことはできない、ということで、泣く泣く私は日本に帰ってきました。私の故郷は宝塚なのだから宝塚に帰って暮らそうということで、二度と韓国には帰らないでおこう、こんな韓国人大嫌いだ、と私は心に傷を負い、日本に帰ってきました。

ただしばらく、一年間は人に会うのが嫌でした。「申さん、あんた韓国に行くといっていたけど、いつ帰ってきたの？」といわれても、「ごめんね、これからもう私を申さんと呼ばないで」と。もう、「申点粉」という名前さえも否定しようと思って、それほどまで傷ついてしまったのです。生まれ育った日本では、「おまえら朝鮮人だ」と言われるし、韓国では「あんたはそういうけど、私たちから見たら日本人でしかないのだ」といわれ、私は生まれ育った日本にしか住む場所がないんだと思い、日本に帰ってきました。けど、１年間はやはり、家に帰ってきても人に会うのが怖い、これから私はどうしていったらいいのか、ということで、死ぬことばかり考えていた時期もありました。無学の母ではありますけれど、やはりそのことを察知したのは母でした。「お前が何を考えているか分かっているよ。」ご飯も食べないで、私はやせ細っていました。「お願いだから、ご飯を食べて生きてくれ。それが私への親孝行なのだからね。」こう言われたら、親を悲しませるわけにはいかないので、私も一大決心をして、日本人のふりをしていくのだと思い、生きてきました。

７．結婚と育児

そして気がつくと３０歳になって、これは大変だということで結婚したのです。２３～４回目のお見合いの中で、２０回ほどは気にいってくれたのですが、言ってくれるのはいいのですが、私にタイプではなかったので無理に断っていたのですけれど、３０歳になった瞬間、えらいことだと思っているそのタイミングで、電話がかかってきてプロポーズされたので、仕方ないなぁ、もういいわ、といって。こんな気持ちで結婚したらいけませんよ。しかし、そういうことで結婚をして、おかげさまで可愛い２５歳の娘と、２２歳にな

る男の子を授かったので、本当に喜んでおります。それまでは、「おぎゃぁ」と産まれても、戸籍、出生届を出すときはふたつの名前、戸籍上の名前と、姉から言われたのですが私の意志で、ということで、ふたつの名前を命名していました。なので、幼稚園に行くとき、小学校に行くときはずっと日本人の名前だったのだけれど、私が子どもを生み育てたら、あれほど嫌いだった韓国が、私のお父さんお母さんに私の赤ちゃん見て欲しいな、私こんなにかわいい赤ちゃんを産んだよというところを見せたい、という思いが、イコール愛国心、両親を思う気持ちが、自分は日本人のふりをしていても、やはり韓国人なのだ、朝鮮人なのだという思いがあるので、こんな気持ちで子どもを育てていいのかな、どうしようかな、と思いつつも、娘が幼稚園に行くときは、やはり日本人の名前で行かせました。それまでは家の中では、「おじいちゃんおばあちゃんは韓国人だし、お父さんお母さんも韓国人だからね、あなたも韓国人なのよ。」といい、その分、韓国から文化公演があったら、高いチケットを買って、「これが韓国の文化だよ。素敵だね。かっこいいね。」ということを見せながら、チャンゴを叩かせたり、韓国の綺麗なチマチョゴリを着せて民族舞踊を習わせたりするけれど、「友達や学校に行ったら話したらいけないよ。」ということを言っていたものですから、娘も、後で気がついたのですが、幼稚園の年長から小学校に入るときに、みんな誕生日会をして、行ったり来たりするのに、娘は全く行かないのです。行かないし、連れてこない。「かなちゃんどうした。お友達と遊ばないの。」「うん、別に。」というのです。それまでは私が、友達がいっぱいいるので、「私大きくなったらお母さんみたいになりたいの。私お母さん友達がいっぱいいて楽しそうにしているのを見たら、私もお友達たくさん作りたい。」と言っていた子が、幼稚園の年長組みから、だんだん小学校、高学年になると、友達を作らないで、「どうしたのかな。なにかあったのかな。でも、あなたは朝鮮人だから気をつけなさいよ、いじめられるから。とは一切言わないし、ただ黙っておきなさいよ。」といっただけなのに、娘にそれとなく聞いたら、「韓国、朝鮮から台風が着たとか、やい朝鮮といわれると、そんなことは聞きたくないから、離れてしまうの。お友達とそんな話をするのはいやだ。」ということを言いました。娘はいうのです。「朝鮮の悪口を言うから。朝鮮と言ったら臭いし貧乏らしいよ、と言われるから、私はそんな子達とお友達になるのは嫌だから。だからいいのよ、別に。」ということでした。直接的にいじめられはしないけれども、自分から避けるのは私の若い頃と全く一緒。３０年、４０年を過ぎても、同じ状況が続いているのだということに気がついたのです。

その時から私は、嫌でもいじめられてもいいから、自分を隠すことは辞めよう。私は「申点粉」なんだ、娘は「キム・カナ」なんだということを出していこうということで、娘と息子を連れて、２週間の韓国旅行に出かけることにしました。ソウル、釜山、済州島を一週間かけて旅行して、残りの一週間は両親の生まれた本家のある、本籍地に連れて行って、過ごしたのです。そして、小学校三年生でしたから、「どうやった。」と聞くと、「お母さんがいつも言っているように、ソウルや釜山は本当に日本と変わらない事が分かったし、だけど、お母さん、一つだけびっくりしたことがあるの。」「どうしたの？何？」と聞いたら、

「あの田舎へ行って、田舎に行くと日本からお客さんが来た、と言って、子どもを連れてきたと言ったらみんなが歓迎してくれて、どこの家に行っても、お茶を飲んで、ご飯をたべて、と言ってくれるのが韓国なのだけれど、行く度にどの家に行っても、冷蔵庫はあるし洗濯機はあるし。自分の日本のクラスメイトに、「電話がない」、といってくる友達がいたけれど、韓国の田舎のどの家に行っても電話もある、テレビもある、冷蔵庫もあるから、私びっくりした。」「そうでしょう、朝鮮イコール貧しいと考えたらいけないよね。日本でも電話のない家はあるのだよ。一概にそういう風に決めたらいけないよね。」と言うと、「お母さん、私、そんなのがよく分かった」といいました。韓国を見聞することで、「百聞は一見にしかず」といいますけれども、親から言うよりも、子どもが小学校３年生の目で見たことで、大きく心を開くことになり、本当に良かったな、と思いました。

８．素晴らしい先生との出会い

小学校４年生のときに、素晴らしい担任の先生に出会ったのです。それまでは、何とか言いたいと思って、家庭訪問の時期になったら、部屋を掃除して、玄関には韓国の綺麗な夫婦の人形を飾ったりして、先生が来て座ってもらう座布団は、綺麗に刺繍した座布団で、「先生どうぞ」と言うことで、韓国のにおいを振りまいてはいたのですが、小学校１年生のときの先生は全然気が着いてくれなかったのです。２年生のときの先生は、「あぁ、そうだったのですか。」「そうなのです。」といって、それでおしまい。そして３年生の時も、「私、何とかしてあげたいです。」とは言ってくれたのですが、それも１年で終わってしまって。「あぁ、だめだな。」と思い、表札も二つかけることにしました。それで、小学校４年生のときの担任の先生は、新任の先生だったらしく、「お母さん、二つの表札があるのですか。」と言って、通称名で学籍簿を書いていましたから、日本人だったと思っていたようです。「実は、私たち家族は在日なのです。」「そうですか。」と言う話をしながら、先生が、「お母さん、私先生にはなったものの、在日コリアンの近現代の歴史を知らなかったのです。すみませんが、お母さんでよかったら教えてもらえませんか。」と言いました。私は、そういうことを言ってくれる先生に初めて出会ったのです。「実は、私の娘はコリアンで、出来たら日本人のふりをする通称名はやめて、本名にしたいと思って、いいところまでいくのだけれど、やはり嫌だと言うことで困っていたところなのです。」と言ったら、「お母さん、私も本当に分からないですけれども、そのことを頭に入れて頑張ってみます。もし、在日のことで分からないことがあったら、お母さんまた教えてくださいませんか。」と言ってくれました。そういう先生に出会って、私は本当にここまで来た甲斐があったな、ということで、すごく喜んだのです。

そういうことで、「今日は、かなちゃんのおじいちゃんおばあちゃんが住んでいる朝鮮の話をしましょう。」ということで、授業の４５分全部を使うのではなく、ホームルームの時間の５分やや道徳の時間の１０分など、少しずつを使って、先生が、私の娘のことを頭に入れてクラスメイトに話をすると、「今日は、こんな話をしたら、クラスメイトはこういう

反応をして、かなちゃんはこんな顔をして、こんな発言をしていましたよ。」ということを、手紙に書いてくれたのです。それを、連絡帳ではなく、手紙に書いて、「かなちゃん、これお母さんに渡してね。」と言って、「お母さんこれ手紙。」「」先生が渡してくれたの？忙しいのにね。」ということで、それを読んだら、「そうなのか。」と。「先生ありがとうございました。お忙しいのに、私の娘のためにいろいろしてくださって。この手紙をいただいて、こんな話をしました。」という手紙を、また娘に「先生にこの手紙をこっそり渡してね。」ということをしているうちに、娘が、４０人の中の自分は在日コリアンの３世ですけれど、「自分だけだと思っていたけど、自分の先生とクラス他人がなにか知らないが、手紙のやり取りをして、私のことを考えてくれているのだ。」ということを肌で感じたようなのです。

この日本の国は人口が１億２５００万人いるなかで、いろいろな人種差別、性差別、障害者、いろんな差別があるけれど、私はそれが少数派だということだけではなく、いろんな差別の対象になっている。「マイノリティ」というのですが、私たち在日コリアンも紛れもなく「マイノリティ」であると思うのですが、「マイノリティ」には、自分を支えてくれる人が一人でもいると元気がでるのですね。ちょうど、担任の先生が私の娘を支えてくれる人、理解してくれる人になったのではないかな、と思います。そして、韓国旅行もしていたので、先生も、「かなちゃん、そろそろ本名で行ったらどう。お母さんも言っていたけれど、どう？」といったら、お母さんだけではやはり「嫌だ」と。まだ、何がしか不安があるのか、ということでしたが、先生と話していた中で、小学校４年生の冬休み、「かなちゃんと話をしてみたら、かなりいい線いくので、冬休み中にお母さん話をしてみてくださいね。」という手紙をいただいたのです。「先生、お忙しいのによくここまで。本当にありがとうございます。」ということで、冬休みは２週間くらいですよね。だけど私は、４０年間二つの名前を使い分けて、いろいろな悲しい思いもしていましたら、やはり勇気がない。娘に王手をかけるのになかなか勇気がなかったのです。気がついたら娘が「お母さん、明日から三学期、新学期だよ。」と。「担任の先生との約束を忘れていたわけではないけれど、明日なの。」と言うと、娘のほうから、「お母さん、名前のことだけどね、私５年生になったら本名でいくわ。」と言いました。「え、本当にそうするの。そう、あなたも考えてくれたのね。」といって、私は娘を抱きしめました。１０歳の娘に、担任の先生の影響がどれだけ強かったかがよく分かりました。でも「あなたは良く頑張ったけれど、一つだけお母さん約束してくれる。この本名で嫌なことがあって、明日から日本の名前に戻るわ、ということだけは言わないで欲しいの。せめて１年間だけは、嫌なことがあっても本名で通うことを覚悟して、お母さんと約束して欲しい。」と言うと、娘も少し考えて、「うん、わかった。いいよ。そうする。」と言ってくれたのです。そして、下の男の子も、ピカピカの１年生で、息子のときは母乳を飲ます頃から洗脳していました。「日本の名前ではなく、本名で学校に行こうね。」と洗脳していたので簡単だったのですが、お姉ちゃんと同じ学校に、本名で入学することが出来ました。

そして、小学校５年、６年。６年生のときには、チマチョゴリを来て卒業しました。

９．娘の民族的アイデンティティ

そして、中学校に行き、高校に行き、そして大学に行き、去年、一昨年大学を卒業して、本当は障害児教育専門の先生になりたかったけれど、自分がマイノリティだから障害児の気持ちも少しは分かるほうではないかな、ということで頑張ったのですが、東京の学芸大学を２度落ちまして、あきらめて、日本の大学４年通って、就職をして、今現在本名で、バリバリ頑張っています。その間１度も、日本の名前に戻りたいとは言いませんでした。息子もそうです。娘は、小学校のときに、本名にして２～３ヶ月して「お母さん、私本名にして本当に良かった。「もっと早く本名にしていればよかった。」と言ってくれました。「そう、あなたがそういう風に言ってくれたら、お母さん何より嬉しいわ。」と。そこには、クラスメイトへの先生の配慮の中で、クラスメイトが、「いままでと同じ杉本かなちゃんが、キム・カナになったことで、かなちゃんのことをもっと知りたい、仲良くしたい」ということで、友達が増え、友達が増えたことによって、精神がとても安定して、授業をすると勉強も出来て、成績もどんどん上がったので、我家にとっては、本名宣言をするということは、こんなに素晴らしいことなんだ、と私は思いました。そして私も、４０歳のときに、それまでの二つの名前を使い分けていた私と決別し、何と爽やかで、何と幸せかということが、本名を名乗ることによって、日本人の友達がとても増えました。今、私の手帳には、在日の友達も多いほうですが、その３倍が日本人の友達であるということ。娘がいつも、「お母さん、素敵な友達にいっぱいめぐり合えてよかったね。」ということを言ってくれます。今でも、「今日は家で、炭火で焼肉を焼いて食べようと思うけど、来る？」というと、「よっしゃ」といって、日本人の家族、ご主人、奥さんも子どもを連れてきて、一緒に焼いて食べる。そして、「申さん、こんなもの作ったのだけれど、食べる？」と言ってくれる。そういうことが自由に出来るようになって、なんて爽やかで、なんて幸せかということを、私は考えております。

娘が、高校３年生のときの話ですが、自分が本名宣言をしてかなり慣れた時期、高等学校にはあちらこちらの地域から集まって気ますので、自分が知らない友達がいますので、「私の事わかってくれる？キム・カナというのだけれど。」といって、涙を見せたら、自分と中のいい友達が４，５人いた仲で「え。キムさん外国人だったの。だったら中国人なの。」「ううん、在日コリアン３世なの。」といったら、「あぁ、そうなのだ。そうしたら、知っている韓国語はなしてみて。」と言われました。それもすごく嫌でしたけれど、そのときに、一番仲のいい友達が、「カナちゃんそんな事気にしなくていいよ。一緒なのだから。」と言ってくれたのです。その友達は、私の娘のことを非常に好きで、思い遣りで言ってくれたのですが、娘にとっては、自分が在日コリアンの３世であることを出しているのに、それにふたをされたような気もちになったのですね。この感覚が皆さん、大体の方が分からないとおっしゃいます。要するに、「日本人と同じ」といってふたを閉めるのだけれど、そうではなく、「そうなのだ。じゃあ、なんで金さんはここに住んでいるの？おじいちゃんが日

本に来たに？それともおばあちゃん？どうして来たのかな？」ということを、質問でもしてくれたら、娘は喜んだと思うのですが、「一緒だから気にしなくていいよ。」と言われてしまったのです。そして帰ってきて、「お母さん、今日こんなことがあったよ。」というから、「あなたね、その友達はカナのことが好きだから、慰めてくれたんだと思うよ。けど、そうじゃないという事をあなたが心から時間かけて言ったら分かってくれるから、それでいいじゃない。」と言ったら、「まぁ、そうするわ。」と言ったものの、「第三者の人は「あなたは韓国人だ。」と言うし。」と。私は、「あなたは、日本で生まれ育った在日韓国人三世なのだから、全然知らないことを自慢してもいいのだから、恥ずかしがらなくてもいいのよ。」と言いました。生まれ育って韓国に触れ合うことがまずない。日本人のふりをして生きている親からは教えられない。そういう環境ですから。

そうしているうちに、それぞれ高等学校を卒業して、大学に通っていたら、２０歳の時に、私の娘に友達が、「特別に、今日は金加奈とお母さんに謝りたいことがある。」といって、ぜひ家に伺いたい、と言うのだけれど、私はちょうど用事があったのでいなくて、娘とだけ話をして帰ったので、帰ってきて「今日は何の話だったの？」と聞くと、その親友は、「自分が大学へ行くことによって、日本の大学の近現代史を勉強することで、植民地支配されて、在日コリアンがそれによって日本に住んでいる、ということを知って、すぐに「キム・カナ」という友達のこと、そして高校時代「一緒だからいいよ」と言ったことによって、彼女のことを傷つけていたのだ、ということに気がついた」と言うのです。「同じこの日本の国に生まれ育って、同じ学校で勉強しているから、一緒だと言ったけれども、１６歳になったら市役所に行って、外国人登録の手続をしなければならない。一緒だ、と言った私なんか全然していないのだから」と。また、２０歳の時点では、ちょうど加西市の市長選挙があって、「私には投票用紙がきたけれど、カナちゃんにはきてないよね。これは、私たちが知らないから一緒だと言ったけれども、一緒ではない。違いを認め合うことを、私たちはしていなかった。カナ、これから私は、知らない日本人にあったらいつでもカナの事を頭に入れてその事を言っていくから、カナもがんばってね。あなただけ頑張れとは言わないからね。」という友達に出会って、私は本当に良かったなと思いました。この日本の国は、若者云々というけど、本当に捨てたものではない、素晴らしい若者がいっぱいいるのだということを、私は娘の友達から学ぶことが出来ました。

１０．依然として残る社会的差別

この５月の下旬から６月に入ったら、市県民税の請求書がきます。私たち４人家族のうち３人にきました。今年から市県民税が上がり、独身の娘と息子にはとても割高です。私の夫も、全部併せて８０万円ほどの県民税です。それを、脈々と、ずっと払い続けているのに、未だに参政権、投票権がないということ、そして、２０歳になった娘にも、「キム・カナ様。あなたは２０歳になりましたので、国民年金支払いの義務があります。」という請求が５年前に来ました。今また、国民年金をテレビやラジオでとてもたくさん報道されて

いますが、あの、国民年金だけは義務があるらしいのです。私が、２４歳で韓国へ行き、仕方無しに帰ってきたら、住むのはこの日本しかないということで、私は宝塚市役所の年金課に行って、「私、年金に入りたいのです。」といったら、「そうぞ。」ということで、書類を書きました。「申点粉」と書くと、「すみません、外国人の方は国籍条項があって入れないのです。」というのです。「外国人だといっても、私は日本で生まれて、永住権も持っていますし、国民健康保険も入っているのに、何で国民年金に入れないのですか？入らせてください。」と言っても、頑として私たちを入れさせてくれませんでした。ところが、法律がころころと変わったことによって、わが娘にだけは、「あなたには義務があります。」と。権利はないままですが。私は仰天しました。世の中変わっても、私の父母、夫の父母、夫、私には年金がないのに、学生である娘にだけは「義務がある。」ということで、どさっと１年分の支払い書が来たときには、びっくりしました。これこそ、理不尽な事柄ではないだろうかと。アメリカでは、「権利なければ義務もなし。」という言葉がありますけれど、この日本は、権利がなくても義務があるということ。私たちは、在日コリアン２世まではよいのですが、法律が変わって、国民年金支払いの義務ができた時点で、やはり参政権もつけてくれるべきなのではないかと私は思うのです。それでも娘は、「お母さん、」法律で決まったらそれをしなければいけないじゃない。」と。主人は主人で、市県民税がちょっとでも遅れると、「お前何しているのだ。ちゃんと払っておかなければだめだ。」と。どれほど納税の義務を滞納しないで払い続けても、何も還元してこないのがこの日本の現状なのだということです。

１１．差別を克服して共に生きる地域社会を

それでも、私たちは日本で生まれ育っていますから、日本の国が好きです。法律云々と言われれば腹も立ちますが、やはり、私の隣人、出会ってきた日本人は素晴らしい人ばかり。在日コリアンの優しさと、日本人の優しさには雲泥の差があるということを私は言いたいです。ですから、日本人大好きです。でも、この日本の国の制度は大嫌いです。こういうことを言う在日コリアンがいることを、みなさん分かってもらいたいなと思います。でも、われわれの娘も息子も、結婚して、子どもを産んで、また三世、四世が出てくるかもしれませんが、あの韓国に貢献することはまず一つもない。この日本社会に貢献していきたい、役立ってもらいたい。納税するだけでも、構成員の一人でもあるわけで、やはりこの日本で生まれてよかったな、私たちはここで生まれたのだから、この国を愛する、ということを、素直に持って生きたいな、という風に私たちも日々努力しております。こういう在日コリアンの存在を、日本人のほとんどが知らないと思います。ですから、こういう話を聞いて、「なんだ、アンチ日本か。」と思わないで欲しい。

日本の国も好き。あれほど韓国で傷ついた私だけれども、５０歳を越えてみたら、私の祖国でもあるのだということで、韓国の国も好き。両方の文化、まして韓流ブームで、テレビを見たら、このドラマは我々にこういうことを教えてくれているのだ、ということも

勉強になる。いいものをたくさん吸収して、それを次の世代に、出会っていく人たちと分かち合っていきたいな、とそういう姿勢で私は生きて行きたい。残りの人生、後どれくらいあるか分かりませんが、「申点粉さん、あなたの投票権ですよ。」という葉書が来ればもっと嬉しいし、やはり政治にもかかわって、私たちの清き一票が活きていくんだ、活かされていくんだということ。日本人の国民は、参政権を持っていながらも投票に行かない。そんなもったいないことをするくらいなら私にください、といいたいです。国民のみんなが政治を変えていけると思うのです。ですから、我々のことも、皆さんの若い感覚で、国籍は違いますが、同じ人間であるということ、そしてまた、我々は朝鮮人としての誇りや云々よりも、私は人としての誇りをきっちり持って生きていきたいな、とそんな風に思っております。ですから、長い人生いろいろあったけれども、恨みっこ無しで、暗い戦争のことは、戦争で明るい話があるわけはないので、じゃぁ、そこから同じ過ちを繰り返さずに、もっと明るい未来を創っていこうと、未来志向で生きていきたいと思っております。

「多文化共生」のための教育と外国人保護者の
果たす役割－奈良の事例を通して－

研究課題番号　　１８５３０７０６

平成１８~１９年度科学研究費補助金
（基盤研究（Ｃ））研究成果報告書

研究代表者　　田渕　五十生
（奈良教育大学教育学部教授）

平成２０年６月

〒６３０－８５２８奈良市高畑町
奈良教育大学社会科教育研究室
電話・ファックス０７４２－２７－９１７７